96
V
572

理學士 山上萬次郎 校閱

極北と極南

小林房太郎 著

東京
如山堂藏版

96-572

北極と南極

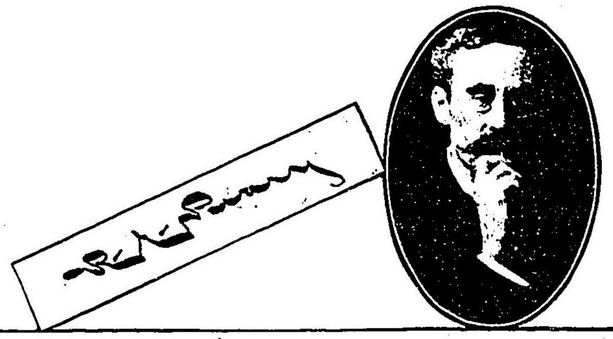
理學士　山上萬次郎校閲
小林房太郎著

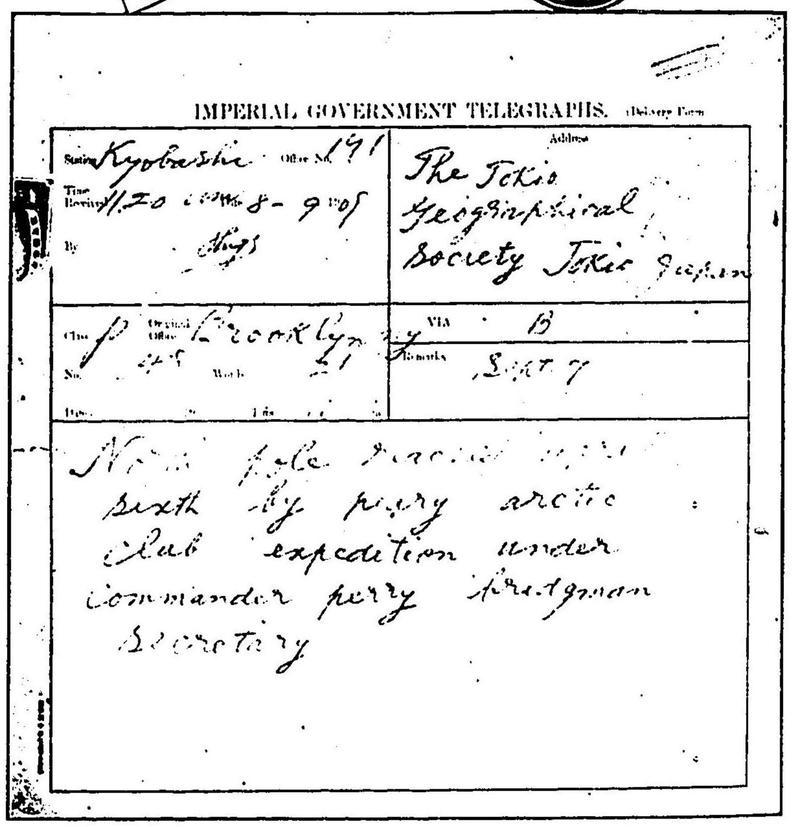
表面

裏面

東京地學協會よりノルデンシヨルド氏に贈りたる銀牌

（圖縮一分四）





IMPERIAL GOVERNMENT TELEGRAPHS. (Delivery Form)

Station Kyobashi Office No. 191
Time Received 1.20 [illegible] 8-9 1905
By Hugs

Address
The Tokio Geographical Society Tokio Japan

Class P Original Office Brooklyn N.Y.
No. 249 Words 21
Date Time

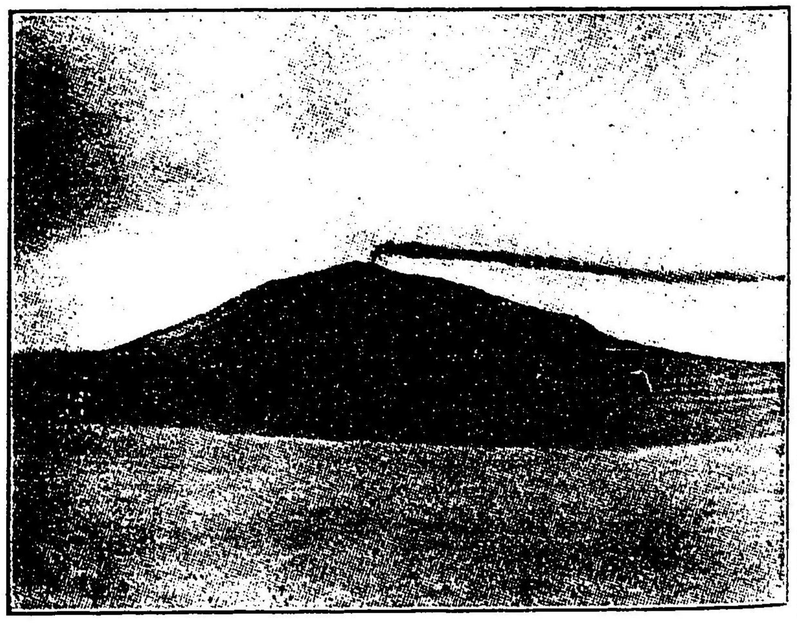
VIA B
Remarks Sept 7

North pole reached 1905 sixth by peary arctic club expedition under commander peary first grade secretary

報電の知通達到極北氏ーリアピ

(宛會協學地京東)

ペンギン鳥



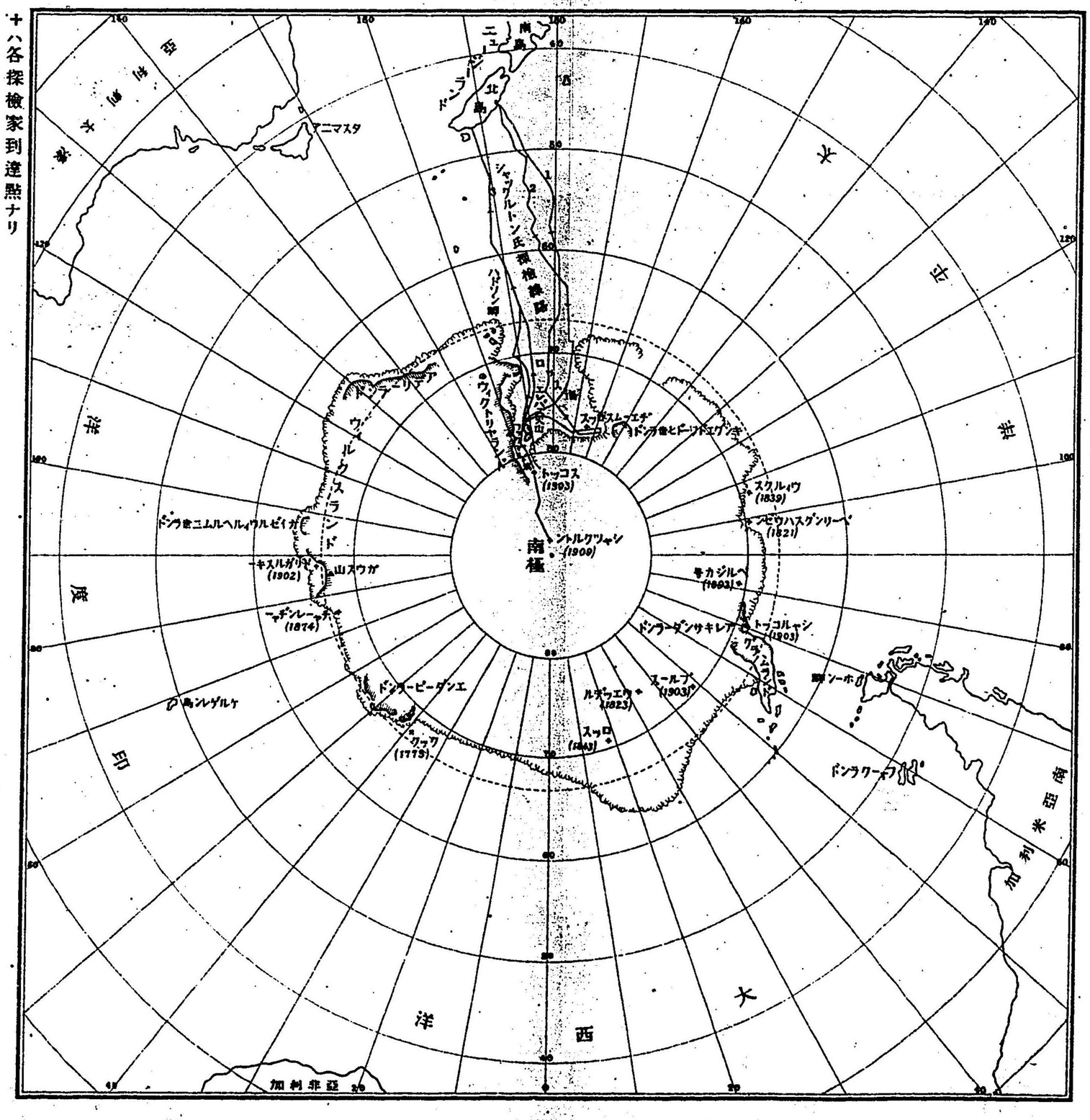
エレバス火山

氏ントルクッヤシ

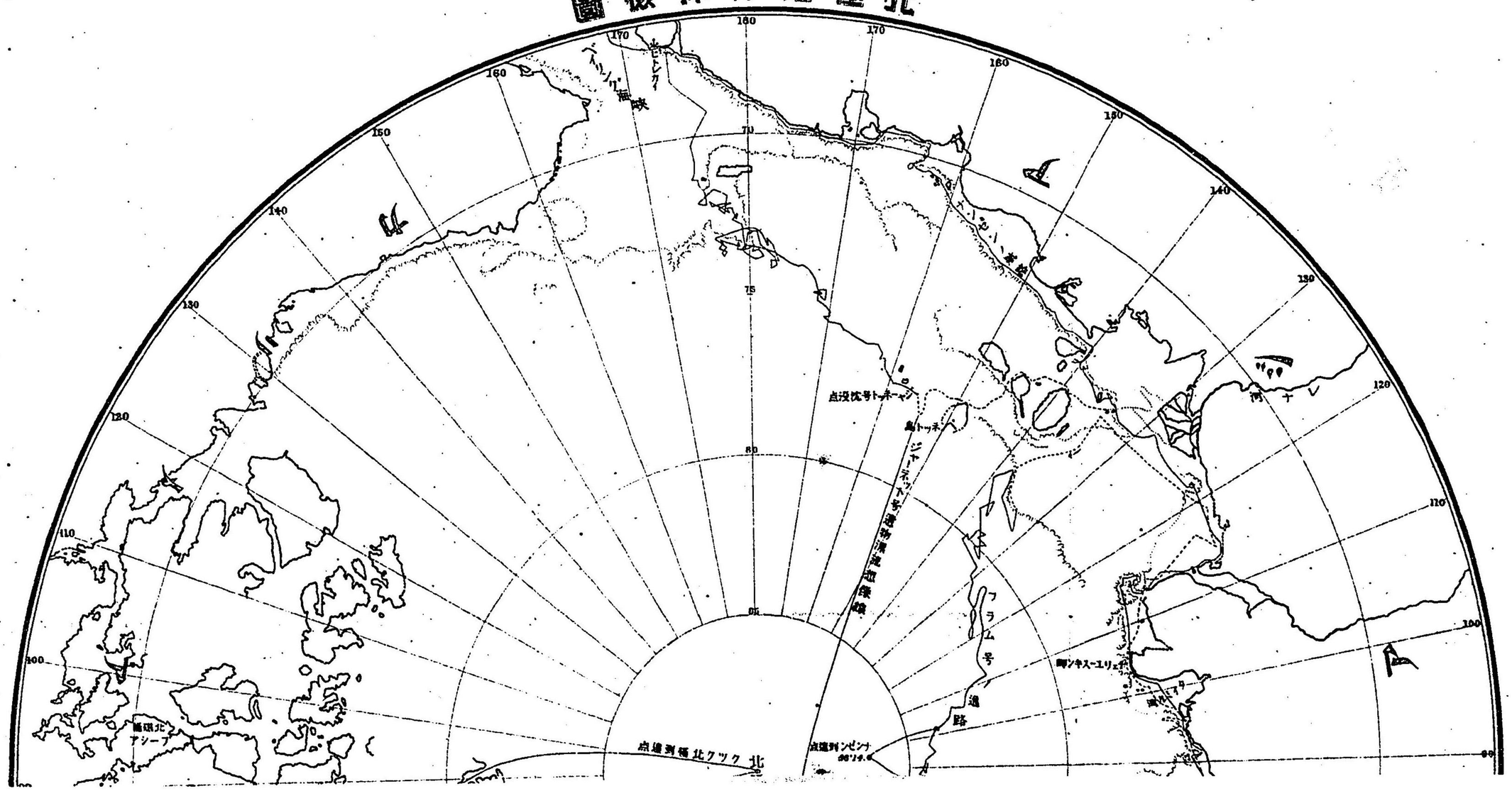
氷浮と堤氷の頭潜ドーマクツマ

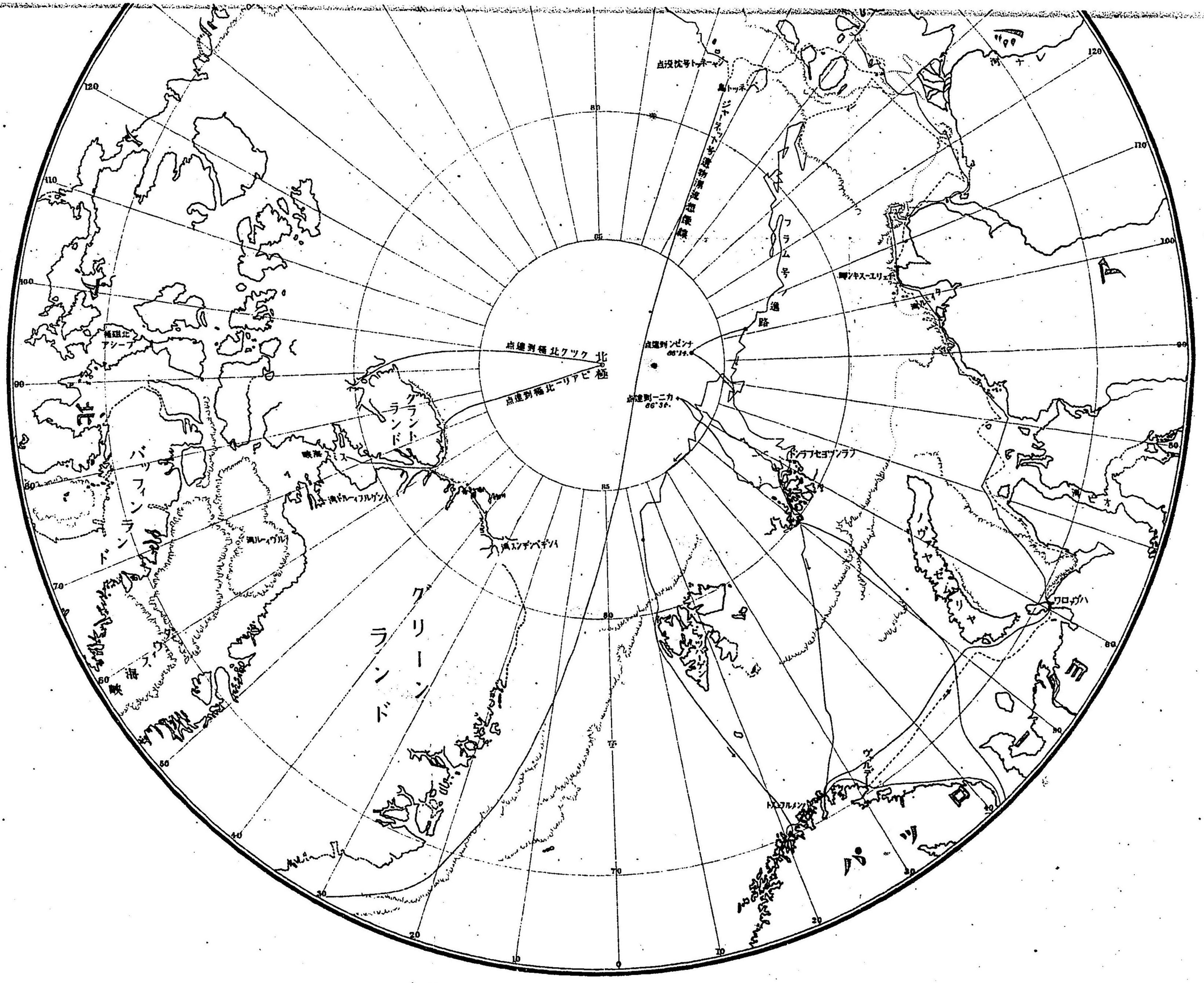
南極地方探檢圖

十八各探檢家到達點ナリ



北極地方探檢圖


ベーリング海峡
点線測稿北クック北
点線測ンピンナ
フラム号
道路
ジャネット海峡
点没枕号トッキャン
島トッキャン
ヘルシンキ
ペテルブルク
ウラル山脈
ウラル
ヤクーツク
ベーリング海峡
ヤクーツク
ヤクーツク
ヤクーツク


点没沈号トーネッ
島トッネ
ジャーネット号漂流地探検線
フラム号
遇路
ノンキス-ユリェ
点達到北クック
北極
点達到北ーリアピ
点達到ンピンナ
66°14.
点達到ーニカ
66°36.
グランド
バッフィンランド
峡海ス
ドラフセヨンランド
ノヴヤゼムリヤ
ウラル
クリーンランド
峡海ラ
ウロガハ
ドンコフルメンツ
ヨーロッパ

序

拜啓陳者近來兩極地方の探檢問題世の耳目を衝働せしむること甚だしく彼ピアリーは已に北極點を究め南極に對しては歐米日等の人士其の到達を競ふ有樣に候　此の際世人は兩極の現狀及從來の探檢談等に關し知らんと欲すること切なるも其の書なきに困しみ居り申候　貴著「南極と北極」はよく兩極地方の地形地質氣象生物及探檢記事等漏らす所なく誠に世の渴望を醫するに足るべく且つ探檢事業に關し世の青年を訓戒する所用意周到と存じ候

特に山上理學士を初め福地理學士小川理學博士田中子爵の助力は貴著に一層の光彩を添へたることを信じ申候　不取敢貴著の完成を祝して序文に代へ申候匆々敬具

明治四拾三年八月二十九日

東京地學協會副會長　子爵　花房義質

小林房太郎殿

自序

社會の進歩は駸々として底止する所なく人類の增殖は國土の膨脹を促がして止まず探檢事業是に於てか勃興し亞米利加の發見亞弗利加の周航濠太剌利亞及亞弗利加内地の探檢等ありて地球上未知の地域は次第に縮小せられ本世紀に至りて其の剩す所のもの僅かに人類の定住せる中央亞細亞と然らざる兩極地方とに過ぎず然るに中央亞細亞はスエンヘヂン其他の闡明する所となりて暗黑界を脱せり

兩極地方は寂莫無邊の寒地なり吾人最終の探檢地域たるに係らず北極は已に米人ピアリーありて星章旗を其の極星下に翻へしたり又南極は英人シャツクルトンありて殆んど之に近づきしも未た其の極を究むるに至らず今や英米日獨の探檢家是に向ひて突進せんとす實に探檢事業は文明世界の快舉なり抑も學術の研究に國境なく探檢事業の成否に人種の別あるなし不日南極の地に印すべき足跡南極の風に翻るべき國旗は夫れ何れの人何れの國か」兩極の意義兩極の地理之が探檢の歷史及び探檢の

効果如何これ問者の常に吾人を惱ます所の語なり如かず一書を公にして其の煩を避けんには會々如山堂主今津氏の兩極探檢記の著作を望まるゝあり仍て內外諸書を涉獵して本書を編し一には以て彼の問者に答へ二には以て初中等敎育上の參考書たらしめんとす然れ共予生來菲才且多忙なり此の書自他の希望に副はざるあらんを恐る恩師山上理學士は此舉を賛し數多の材料を供給し且周密なる校閲補正を加へられ子爵田中阿歌麻呂理學士福地信世兩氏は材料の供給其の他につき大

に好意を表せられ理學博士小川琢治氏亦多大の助力を與へられたり而して永嶋藤三氏は本書編纂上予と其の勞を共にせられたり若夫此の書にして多少世に裨補する如きあらんか畢竟以上諸氏の賜たらずんばあらず茲に謹んで感謝の意を表す

韓國併合の當日

東京地學協會の寓居に於て

小林房太郎　誌

凡例

一、此の書題して「南極と北極」となす、純然たる兩極地方の地理書なり。然れ共、氣候　生物　地質　地形　海洋等に簡にして探檢史に密なるは、此の地域の性質上止むを得ざるに出づ。

一、尺度に就ては、屢々米、呎、哩、里、浬、地理里等を用ふ、これ皆な原本を其儘とし敢て改算せざるによる。而して米は我が三尺三寸、呎は凡そ一尺〇〇六、哩は凡十四町四十五間、浬は凡十五町五十八間、地理里は浬と均しく共に緯度一分間の長さなり。

温度は學術上攝氏の寒暖計によるを普通とすべきも、却て民間普通の華氏を用ゐしもの多し、仍て特に攝氏の文字なき限りは

悉く華氏なりと知るべし、之を攝氏に改めんとせば、

(華氏の溫度－32)×$\frac{5}{9}$

一、此の書の編纂上、特に苦心したるは印刷の遲緩と亂雜なるとに在り、之が爲に全体の統一を缺きしこと幾何なるを知らず、誤字脫字亦多かるべし、これ予の偏に讀者に向て謝すべき所なり。

二、本書論纂上の引用書目左の如し。

一　地學雜誌。
一　東京地學協會報告。
一　東京地學協會文書器具。
一　Jaurnal of the Royal Geographical Society.
一　Jaurnal of the American Geographical Society.
一　Paris La Geographie.
一　Bulletin de La Societe de Geographi: Lyon.
一　R, E, Peary Du Pole.
一　Le Naufrage De La Jeannette.
一　J, Thaulet L, Ocean.
一　J, Richard L, Oceanographie.
一　The Antarctic Question Voyage to the South Pole Since 1808.
一　The Heart of the Antarctic Shacleton.
一　Handdook of Polar Discoveries　A, W, Greely.
一　Nelson Encyclopaedia.
一　Century Encyclopaedia.
一　Encyclopaedia Britannica.
一　Stielars Hand-Atlas.

南極と北極　目次

兩極地方

兩極……一
兩極地方……三
南極の夏は北極の冬……四
南極の晝は北極の夜……六

北極地方

一　總論……一〇
二　北極探檢の歴史……一三
三　フランクリンの北極探檢及其搜索……二六
北西航路……二六
フランクリンの蹶起……二七
探檢命令……二九

目次

探探隊の出帆……三〇
探探隊最後の影像……三三
進路の不明……三四
アーシア附近の探檢……三五
唯一の記錄……三六
フランクリンの死去……三八
一行探檢船を見棄……四〇
探檢隊一行の全滅……四三
フランクリン捜索隊と其の探檢……四六
附北西航路通過……四七
四　ノルデンシヨルドの北極探檢……四七
探檢の動機……四八
探檢の準備……四八
ウエガ號の出帆……五〇
エニセイ河口を發して氷の海に突進す……五一
氷塊と闘つて漸くチエリユースキン岬に達す……五三
嗚呼チエリユスキン……五六
レナ河口到着……五七
危險なるスピアトイ岬を過ぐ……

目次

ウエガ號全く進む能はず……五九
ツングース土人の生活……六〇
冬營中の事業……六一
氣候……六四
ウエガ號漸く太平洋に入る……六八
ベーリング島の臨時獄……六九
初めて故郷の消息を知る……七三
ウエガ號と東京地學協會……七四
スウエンヘヂン博士をして大探檢家たらしめしは日本なり……七七
五　ナンゼンの北極探檢……七九
(一)　フラム號の航海……七九
探檢の動機……八〇
探檢の方案……八二
フラム號北極海上に向ふ……八八
ナンゼン自ら水先案内を爲す……八九
人類との永さ訣別……九一
水河遺跡の發見……九二

目次

フラム號氷塊と闘ふ……九五
時機を失ふ虞ありて橇犬を搭載する能はず……九七
フラム號氷山に固着す……九九
船の運命を氷に托す……一〇一
船は氷壓に耐ふること鐵壁の如し……一〇一
フラム號内の情況……一〇三
極海の狀態……一〇五
フラム號の漂流する方向……一〇六
フラム號氷の最大壓力に勝つ……一〇七

(二) 橇旅行……一〇九

氷上突進の用意……一〇九
フラム號との別離……一一一
橇の進行遲し……一一三
氷の結合……一一四
極地の現狀……一一五
大失策……一一六
初めて狐の足跡を認む……一一八
橇犬の死亡……一一九

目次

ペーテルマン陸ありや……一二〇
海豹の美肉に蘇生す……一二一
熊に襲はれ九死に一生を得……一二一
初めて陸地に上陸す……一二三
忠實なる犬を棄つ……一二四
奇鳥ロスガル……一二五
氷上の冬籠り……一二六
冬籠り準備……一二九
宛然たる水晶宮……一三〇
狐の跳梁……一三二
初めて春光に接す……一三四
偉人の希望は新調の衣服……一三五
冬籠後の出發……一三六
殆んど凍死せんとす……一三八
海象の襲撃を脱す……一四〇
遠く猟聲を聞く……一四一
ジヤクソンの優待……一四二
ペーヤーの地圖は誤れり……一四四
フローラ岬頭の漂丘……一四四

目次

ウインドヲード號の便乘……一四六
ノールウエー歸着大歡迎……一四八
(三)フラム號の航海……一五〇
ナンセンの命令……一五〇
氷の破碎……一五一
再び海流に乘る……一五二
氷の壓迫……一五四
極海の寒氣……一五五
極光……一五七
海の溫度と海の深さ……一六〇
衛生狀態……一六一
氷を破壞して其の重圍を脫す……一六一
ナンセンの消息……一六二
歸結……一六三
六ピアリーの北極探檢……一六五
グリーンランドの探檢……一六五
最北極探檢を企つ……一六八
愈北極に達す……一六九

目次

北極の現狀……一七一
七北極地方に於ける現今の知識……一七三
グリーンランド島……一七三
新シベリア諸島……一七八
スピツツベーゲン諸島……一七七
ノヴアヤセムリア諸島……一八五
フランツヨセフ島……一八九
北極洋地方の生物其の他……一九〇
南極地方
一總論……一九三
二南極探檢の歷史……一九七
三ゼームスクックの南極探檢……二〇三
第一回の航海及其の目的……二〇四
土地の發見……二〇五

目次

第二回の航海……二〇六
第三回の航海……二〇七
四ゼルラシュの南極探検……二〇八
探検の目的……二〇八
地理及地質の調査……二一〇
氣象の調査……二一五
動植物の調査……二一九
五ノルデンショルドの南極探検……二二〇
目的……二二〇
探検と調査……二二一
探検船の破壊……二二五
探検隊員の救助……二二六
探検の効果……二二七
南ジョージア及フォークランドの視察……二三六
六ロッスの南極探検……二四二
兩極の探検家……二四二

目次

第一回の南極探検……二四三
第二回の南極探検……二四五
第三回の南極探検……二四九
七スコットの南極探検……二五〇
キングエドワード七世ランドの發見……二五〇
橇旅行の兩隊……二五二
探検の効果……二五三
救助隊の派遣……二五六
救助次後の探検……二五九
氷堤の退部……二六二
南磁極の調査……二六四
地質上の調査……二六五
八ブルースの南極探検……二六六
第一回の探検順路……二六六
探検の目的……二六七
探検の効果……二六七
越年地點の觀測……二六八

目次

スコチア號の視察……二七〇
第一回探檢船の出發……二七〇
新大陸コーツランドの發見……二七一
ロッス深溝及南大西洋の海底山脈……二七三
歸航……二七四
九　ドリガルスキーの南極探檢……二七五
ガウス號の出帆……二七五
越年……二七七
陸地の命名……二七七
學術上の觀測……二七九
氣候の狀態……二八一
狩獵の慰藉……二八二
橇旅行及登山……二八三
歸航……二八四
一〇　シャックルトンの南極探檢……二八七
(一)　探檢の準備……二八七

目次

シャックルトンの略歷……二八七
費用……二八八
糧食……二九〇
橇……二九三
探檢船……二九五
橇馬……二九七
探檢隊員……二九八
船員……三〇一
(二)　航海……三〇三
英國出帆……三〇三
愈南極に向ふ……三〇七
氷堤……三一二
(三)　冬營……三一五
冬營地點の選定……三一五
價値ある冬營地……三二〇
橇旅行の用意……三二二

目次

エレバス探檢隊の出發……三二五
生物學上の發見……三二五
橇旅行の練習……三二六
(四)エレバスの登山……三二八
登山準備……三二八
エレバス火山……三二九
エレバス山頂……三三二
エレバスの高さ……三三三
氷河の遺跡……三三五
エレバス山の外部構造……三三五
氣溫の垂直的變化……三三九
(五)磁極發見……三三九
目的……三三九
橇旅行……三四〇
南磁極の發見……三四三
(六)南極進行隊……三四六

目次

準備……三四六
出發……三四八
愛馬の銃殺……三五一
一紀念すべき日……三五二
自ら橇を曳く……三五五
大氷河……三五六
石炭の發見……三五八
南極高原……三五九
クリスマス……三六一
山嶽病……三六三
食物愈缺乏す……三六五
南進の困難……三六六
終局點に達す……三七一
歸途に就く……三七三
殆んど絶食……三七五
劇烈なる下痢病……三七六
人跡を認む……三七九
シャックルトンの先發……三八二
ニムロッド號に歸着す……二八四

目次

附　南極探檢隊の諸費用……三八六
一一　シャルコーの南極探檢……三八八
一三　南極地方に於ける現今の知識……三九一
南極大陸の地形……三九一
古の南極大陸……三九四
南極の火山……三九七
氷堤……三九八
寒氣の減却及氷山……三九九
南極の生物……四〇〇

餘論

一　探檢……四〇七
探檢の意義……四〇七
探檢隊の覺悟……四〇八
探檢家たる資格……四〇九
スエンヘヂンは探檢家の異曲型……四一二
日本青年に對する希望……四一四

目次

無謀の擧に生命を失いし實例一……四一六
同　二……四二〇
二　探檢の餘地……四二四
南極と北極……四二四
日本近海……四二五
亞細亞大陸其他……四二七

目次

挿版挿圖目次

一、シャックルトンと南極氷山
二、ピアリーと電報
三、ペングイン鳥とエレバス山
四、南極地方圖
五、北極地方圖
六、ピアリー外一名探檢線路圖
七、スピッツバーゲンとフランツヨセフ
八、ノルデンショルドに贈りし銀牌圖

南極と北極

理學士　山上萬次郎閲
小林房太郎著

兩極地方

兩極

人間の住んで居る此の地球は、遠き昔には平らなものと一般の人に信じられて居た。彼のアメリカの發見で有名になつたコロンブスが、スペイン國の都で、學者や貴族の面前で地球の圓いこと

を說明した時には、殆んど之を信ずるものがなく、もし地球が圓いならば、自分と反對の側に居る人は、逆しまに立ち逆しまに歩まなければならぬなど、、てんで相手にしない程であつた。今では學問の發達進歩が甚だしくなつて、引力の道理も分り、天文學や地理學が驚く程進んで來たから、多少文字を解するものは、地球の圓いことを疑はぬ樣になつて來た。

地球は凡そ二十四時間、精しく云へば二十三時五十六分で、西の方より東の方にくるりと一廻り回轉するものである。太陽や月が、東から出で西に入る樣に見へたり、宵の明星が夕方西に見へたり又之と同一物なる夜明けの明星が朝方東に輝くのも、澤山の星が霄と夜中、夜中と夜明とに、其の居る場所を違へて居るのも、みんなこの地球の西より東に廻る結果である。即ち地球の自轉によ

るのである。此の地球が自轉するときは、丁度獨樂の心棒の樣に軸になる處がある、其の軸の北の端が北極で、南の端が南極である。

兩極地方

地球の北の極から南の方に凡そ二十三度半の處に一つの線を畫くと是は一つの大きな輪即ち北極圏をなす、此の輪は極の四方を取り卷いて饅頭笠の樣な形ちになる。此の饅頭笠の樣な所が北の寒帶で、俗に謂ふ北極地方である。斷つて置くが北極ではない、北極と謂ふのは其のまんなかの一點だ。

南極地方もこれと同じで、南極から凡そ二十三度半の處に一つの線を畫くと、この線は地球を取り卷いた輪、即ち南極圏である。

この南極圏で圍まれた處が南極地方である。南極はやはり其の眞中の一點である。

南極地方の夏は北極地方の冬

北極地方の時候は、近頃は、日本や支那朝鮮やヨーロッパと同じく夏である。これは太陽が赤道の北の方を照して居るからである。それであるから、赤道から北に當れる所謂北半球は、暑さも強いし雨も多く降るし、草や木も亦繁茂する、鳥も獸も騒ぎまはる時である、特に北極に近き地方の最も樂しき時である。

此の時季には、南極地方は全くこれと反對に冬である。寒さもひどいが雪も降る、海も一面に凍つてしまう。

近頃、日本郵船會社の三つの大滊船が、輪番にオーストラリヤ

洲に航海して居る。このオーストラリヤは、赤道より南で、所謂南半球に在る、無論南極地方に近いのである。郵船會社の船に乘れる船員船客は、冬日本を出帆して一ヶ月經ぬうちに、オーストラリヤのシドニーやメルボルンに着くが、此處は日本と全く違つて夏である。又日本の夏の時に行けば、此處は無論冬である。燕といふ鳥は、年々夏の初めに日本や支那に來て巣を營み卵を孵化し、秋になれば去つてしまふ、來年の夏亦やつて來る。これは此の鳥が寒き冬を好まぬからである、冬は自分の食物であるべき、蚊も蠅も、其他の小蟲も極めて寡ないからである。この寒き季節に、燕は何れに行つて居るかといふと、無論南半球の南洋地方である。斯く南北兩半球で、氣候の反對なのは面白き對照ではあるまいか。

南極地方の夜は北極地方の晝

南極と北極とは、單に夏と秋とが違ふばかりでなく、晝夜の時間が全く違つて居る。北極地方では、六月の二十一日若しくは二十二日頃になると、大陽が決して地平線下に沒しない。即ち太陽は、地面や海面を照し續けて居る。一時でも山の蔭や海の彼方に沒することはない永久の晝である。地面の堅氷の融けるのも此の時である、鳥は南の方からどんどんと飛んで來て、盛に囀づる、狐や熊や其他の獸類も盛んに徘徊する。人間も南の方からやつて來るのがある、少しく極を遠ざかると草は一時に萠え出で、何れも自分の天地と謂はんばかりにどしどしと生長する、其の生長の早いことゝいつたら、兎ても溫帶地方で見られぬほどで、實に不

思議である。

地面はやがて一面の花をつける、ヤナギランもモウセンゴケも其他の極地性植物も、何もかも滿目これ皆な錦の毛氈。よく高山地方へ行くと、御花畑といふのがある、見渡す限りの花園であるが、シベリヤや、其他の北緯に在るアイスランドや、グリーンランドの或場所も、即これに違はぬのである。實に美はしき天地である。然しながら、スピッツバーゲンや、フランツヨセフなどに行けば、滿目これ皆氷原であるから、花などは餘り見られぬが、鳥や獸は盛んにやつて來る。

この永き晝は全じ年の九月の二十三日、即ち秋の彼岸の中日まで續く。最も斯く半年晝で續くのは北極の一點に限るが、北極圏以内には二十四時間以上日の沒しない晝が何日か續くものである。

南半球は、六月二十一の夏至から、秋の彼岸の中日までは、どんなであるか、これは又北半球とははげしき相違である。此の季節には、全く日光を見ることは出來ぬ、永く引續きの夜である。尤も此の永き夜の始めと終りとには、太陽こそ見えぬが、所謂黎明と黄昏といふものがあつて、多少は明るくはあるが、實にさびしき限りである。夏中來て居た鳥も去つてしまふ、獸も多くは見えなくなる、二匹や三匹の狐は居るが、眞の死せる天地である。只此の時此の際、人を慰めるのに足るものがあるとすれば、夫は極光である、後にも記す積りであるが、闇黑の天地を破つて、大なる虹の如きもの、半圓形をなせるもの、紅青紫等の色を現はして天空を遮る、實に美はしき極みである。

十二月二十一日即ち冬至からかけて、來年の三月二十一日即ち春の彼岸の中日までは、北極地方の引續きの夜である。斯く半年夜で續くのは北極の一點に限るが、北極圏内には二十四時間以上日が出ないで、夜が何日か續くものである。南極地方は此の季節には永き晝であつて、太陽は決して地平線下に沒しない。北極地方の永き晝は、他の南極地方の永き夜であつて、南極地方の永き晝は北極地方の永夜である。一方の極樂時節は、他方の寂滅の天地である。これも面白き對照ではあるまいか。

北極地方

一　總論

位置及水陸の分布

北極圈內の地には亞細亞の北シベリヤ、歐羅巴のロシヤ北部、北亞米利加の北部と北氷洋群島とを含んで居る。けれどもこの亞細亞、歐羅巴、北亞米利加の三つの大陸の續きに就ては、別に說明する必要がない。此の三大陸に圍まれて居る部分が此の本題の主眼である。

北氷洋內の島嶼

右の三大陸に圍まれて居る處は、世人の一口に北氷洋又は北極洋といふものである。これは、最初大なる海であるとの考へから名を附けたものである。其の後此の所謂北氷洋には、大なる陸がある、決して海洋ではない、海としても甚だ淺いから、決して洋などゝ大げさな名を附けてはならぬといふ樣な學者も出て來た、然るにナンゼン其他の調べによると、どうも大なる陸地はないのである。勿論、北亞米利加の北の方には、まだ人間の行つたことのない場所もあるが、これとても僅かの場所である。又海の深さはナンゼンの實測によれば、千八百尋から二千尋以上もあるから獨立の海たる價値は充分ある。

先づ此の北氷洋は三大陸に包圍されて居るが、東は狹まきベーリング海峽によつて太平洋と通じ、西はグリーンランドとノール

ウエーとの間の海によつて大西洋と交通が出來る。其の間の極め て狹まい處は二百八十里位のものである。又グリーンランドの西には無數の北極洋群島があつて、其の間を海水が縫つてデヴイス海峽と通じて居る。

北氷洋内の島嶼の名あるものは、先づ**グリーンランド**を擧げねばならぬ、これは實に世界第一の大島である。其の東には、北緯八十度近くに**スピツツバーゲン**Spitzbergen諸島と**フランツヨセフ**Franz Josef Land とがあり、フランツ・ヨセフの南には、弓の樣な**ノヴアヤ・ゼムリア**Novaja Semlia がある、亦東方遙かにシベリヤのレナ河口近くに、**新シベリア群島**New Siberia Islands が横はつて居る。グリーンランドの西の方には殆んど無數の島がある。

二　北極探檢ノ歷史

從來、北方に行はれたる探檢を見ると、左の四期に分つことが出來る

第一期　單に土地の發見を目的とせる古昔の探檢
第二期　北方航路發見の探檢
第三期　水產物捕獲を目的とせる探檢
第四期　學術的調査を目的とせる探檢

と云ふ樣に四大變遷があつた。

第一期の探檢

北の方面の探檢で　歷史に書て居るのは、西洋紀元前三百年頃

ピテアスと云ふ人が、ゾリチス諸島を越えて、ツール島に行つたといふのが始めらしい。このツールは、どんな島か確定の説がない。しかし此の探檢に由つて北の方の夜の長き事や、海の氷結せることも、多少人に分つて來た。次でノースマン族が、西暦八百四十年頃、今のノルウェー國の北岬を越えて白海 White Sea に入りこんだ、これが、北極圏内即ち北極地方の海に進入した初めである。

第二期及第三期

ゴロンブスの亞米利加發見　ヴアスコ・ダ・ガマの亞弗利加廻航　マゼランの世界周航等があつて、世界の耳目を一新させた。まけぎらいの英吉利人は、大ひに奮ひ起つて、亞細亞に行くべき近道を求めんために苦心した。次で、他の國でも此の方面に注目し、盛んに探檢隊を出した。此の近道は、北亞米利加の北を過ぎて東方亞細亞に至らんとする北西航路と、歐羅巴と亞細亞の北を過ぎて、東方亞細亞に至るべき北東航路との二つである。

第四期に至つては、北方に航路を求むる間に、この方面に澤山の貴重なる海獸が住んで居ることに着目する樣になつて來た。鯨、海豹、膃肭獸、膃虎等は此の時代には、無數に居つたから、各國競ふて此の獲物に突進したのも無理はない。であるから此の兩期の中頃からは、一方に航路を求め、他方に水産物の捕獲をやつて兩者相混淆した。仍て此の兩期の探檢家の重もなるものを、併せて次に擧げることゝする。

カボット

西暦千四百九十七年、北米の北東なるニューフアンドランド島に至り、併せて北亞米利加大陸の一部を發見した。

ウイルロービー、チヤンセラー及ペツト

ウイルロービーと、チヤンセラー外一名は、西暦千五百五十三年、ペツトは西暦千五百八十年に、北亞細亞に至らんとして、白海に入り、同地方と貿易の途を開きて歸還した。これらの諸氏は大ひに壞血病に惱まされ多數の船員を失つた。

バロー

千五百五十六年、ノヴアヤ。ゼムリアを發見した。

サー、マルチン、フロビツシヤー

西班牙國のエリサベス女皇、其他の援助を得、西暦千五百七十六年、北西航路探檢の途に上り、デヴイス海峽の入口の北なるフロビツシヤー灣及び、ハドソン海峽を發見した。

サー、フランシス、ドレーキ

南米より北米の北方を航して、英本國に歸らんとし、太平洋よりの入口を求めて得ず、空しく歸つた。

ペツト及ジヤクソン

此兩人は、バレンツと同じく和蘭國の命を受けて北航し、西暦千五百八十年、ノヴアヤ・ゼムリア島を越え、初めてカラ海に進入した。

ジヨン、デヴイス

西暦千五百八十五年より三年間、北西航路發見の爲に、和蘭より派遣せられ、デヴイス海峽を北航し、北緯七十二度に達す。北海上にて船舶が氷に壓迫せられ、其の凄しき音響を聞いたの

は、デヴィスを以て初めとする。

次で氏は第二の航海に於て北緯七十五度に達した。

バレンツ

和蘭の人で、西暦千五百九十五年より三年間の航海をなし、スピッツバーゲンを發見した。

ハドソン

西暦千六百七年、北極を横ぎつて日本(或は印度ともいふ)に至らんとし、グリーンランドとスピッツバーゲンとの間を北進し、北緯八十度二十三分に達し、食糧缺乏の爲空しく歸つた。後西暦千六百十三年第四回目の航海に於て北米ハドソン灣を發見したが、水夫共の爲に病水夫四名と共にハドソン灣内に遺棄せられ空しく北極氷海上の鬼と化した。

バッフィン

西暦千六百十五年、北米のバッフィン海峡を通過し、北緯七十七度四十五分まで行き、グリーンランドの西なるスミス海峡やランカスター海峡とを發見した。これ、從來に類例少なき功である。この人は英國人である

ウイトウス、ベーリング

丁抹人であるが、露國の命を受けて、亞細亞北部の航海に從事し、西暦千七百二十八年、ベーリング海峡内のセント・ローレンス島を發見した。

マツケンジー

ハドソン灣會社より派遣せられ、西暦千七百九十八年北米のマツケンジー河を經て、北氷洋に達した。

フィップス

西暦千七百七十三年、北緯八十度四十八分に達し、氷塊に衝き當りて歸りたり。有名なるネルソン將軍は、當時少尉候補生として乘組んで居つた。

スコレスビー

グリーンランドの東岸に沿ひ、西暦千八百六年、北緯八十一度三十分に達した。これは捕鯨の目的であつた。

パリー

北極探檢の目的を以て、西暦千八百二十七年、スピッツバーゲン以北の氷海を縫ひ、北緯八十一度四十五分に達した。

ゼームス、クラーク、ロッス

其の叔父なる、ジョン・ロッスに從ひて北西航路探檢の途に上り、西

曆千八百三十年、北米北氷洋群島中、ブーシア Boothia 半島の內部なる、北緯七十度西經九十六度四十四分の地に於て、地球の北磁極を發見した。

地球は一箇の磁石にして、通常の磁石の如く其兩極を有す、北なる極は即ち上記の地である、南の極は後に說くべし。此の處に至るときは、各自の携帶せる磁石は、其の極を地面に向けて直立するものである。

サージョン、フランクリン

西暦千八百四十五年、北西航路探檢の目的を以て英國を出帆し此行必ず其目的を達せんとの決心をなし、エレバス、テロル二船を率ゐて進航し、同四十七年六月十一日、ブーシャ附近に於てエレバス船內に不歸の客となつた。

フランクリン捜索隊は澤山派遣せられた。

リチヤドソン、ラエ兩名……

インヴエスチゲートル及エンタープライス二艦外二艦……同年……

右の外東方海路より向ひしもの十隻に下らず……

以上西暦千八百五十一年迄

フオックス號……西暦千八百五十七年

露國政府ノ探檢隊

シベリア北部の海上を、四區に分ちて探檢せしめた。

露國海軍省は、更にヲブテフをして亞細亞の北端を巡航せしめた。

ノルデンシヨールド

瑞典國皇帝又貴族の保護により、ウエガ號に乘じて、西暦千八百七十八年、本國を出帆し、北東航路を經て初めて東方太平洋に入り、其の目的を達した。

ロックウード及ブレーナルド

西暦千八百八十二年、北緯八十三度二十四分に達した。

ジアネツト號

西暦千八百七十九年、北米海軍大佐デロング之に乘じ、ベーリング海峽より進入し、堅氷に船を鎖ざされ、二ヶ年間漂流し、遂に千八百八十八年一月、北緯七十七度十五分の場所に沈沒した。乘組員は一時逃れたけれども、終に餓死した。

第四期

此の期節になると、純然たる學術探檢になつた。北東航路も全

く、航通上に利益の無いことが分つた、北西航路も均しく何の役にも立たぬ、北方水産物の居所には限りあることが分明した、是に於てか、此の氷海地方の學術研究に心を走せた、勿論多少名譽心も伴つたが。

ナンゼン

西暦千八百九十五年四月七日、北緯八十六度十四分の地點に達した。學術上に與へた効果は空前である。

カニー

西暦千九百年四月二十五日、北緯八十六度三十四分の地點に達した。

ピアリー

西暦千九百六年、北緯八十七度六分に達し、尚西暦千九百九年四月六日、終に北極に達した。

クツク

西暦千九百八年四月二十一日北極に達せりと稱せらる。

北極探檢で有名なるものは右の通りである、之がためには數多の金錢を費したのは無論のこと、幾百となく貴重の人命を犧牲に供した。今から考へれば、實に無謀の死に方をしたものが多い樣に見えるが、當時の學術醫業の發達の程度では致方がない。近頃南極探檢に、餘り生命を失ふものゝないのは、實に北極地方に於ける、これらの犧牲者の賜ものである。

以上の探檢は、何れも有名であるが、特にフランクリンの北西航路の探檢は悲慘を以て知られ、ノルデンショルドの北東航路の探檢は成功に輝やき、ナンゼンの北極探檢は大なる功績を學術界

に及ぼし。ピアリーの北極到達は終に世界數多の人の仰望して居つた月桂冠を得たものである。此の四つの探檢につきて少しく詳しく述べよう。

三サ！・ジョン・フランクリンの北極探檢及其捜索

北西航路

北亞米利加の北方、北極洋群島を通じて、東方亞細亞に達する北西航路探檢の爲には、從來、數多の人命と、數多の資力とを犧牲に供した。前に探檢歷史の部に、一寸記して置いた通り、彼の北磁極を發見した兩ロッスの歸國しない所から、之が捜索隊として、英國からパックといふ人を派遣したが、ロッスの無事歸國した爲めに、同氏は引還した。然し、北西航路の探檢は、英吉利人の全力を注いで成功させやうと希望して居る所である、北極洋群島中の何れかに必ずベーリング Bering 海峽の通ずる航路があるに違ひないとは、一般識者の輿論であつた。

フランクリン蹶起す

北西航路を捜索せんとする英國地學協會の運動は、其の功を奏して　國政府を動かした。折しもゼームス・シー・ロッス James C. Ross が、大なる成功を博して、南極地方より良好なるエレバス及テロルの二隻を率ゐて歸國したから、仍て此の二船を利用することとした。丁度キャプテン・ジョン・フランクリン Captain John Franklin が、七年間濠太剌利亞のタスマニア總督の勤務を終へて歸英した

彼は五十九の高齡であるにも係らず、勇氣勃々として居る、特に北極探檢に對する熱心は、壯者を凌ぐ程であつた。彼は自ら進んで北極探檢の任務を志願はしなかつたものゝ、其の經驗と技倆との點から、朝野の衆望を一身に集めて終に躊躇せずに此の重任を快諾して、亞米利加北海岸の測量を成就し北西航路を捜索するは衷心喜ぶ所であると謂つた。

西暦千八百二十一年、二十四年、二十七年バーリーParryと共に北極方面の探檢に從事し、サー・ゼームス・ロッスと南極にも行つたことのあるクロジャーCrozierが、フランクリンの此の行に加つた、其他一行の面々、孰れも其勇氣と技倆と才能との點に於て拔群の人々であつた。船は注意に注意を加へて準備し、此の遠征隊の安全と成功とを保障し、船員の健康と愉快とを增進する爲にあらゆる手段を講じた。

彼等の實行した計畫は、サー・ジョン・バーローSir John Barrowの手に成つた。

探檢命令

此の航海及後にフランクリン捜索に關する事情を明かにする爲め千八百五十五年五月五日付の公文訓令の一部を擧ぐれば

西方に進行するにあたり、ランカスター海峽Lancaster Soundの南北にある灣を探檢せず、直に西方に急進し、ウォーカー岬Cape Walkerの位せる地方の經度、即ち西經九十八度に到着すべし、此部分より南西に深く進入し、氷の位置と延長現今不明なる陸地の有らん限りを調査してベーリング海峽に進入す

べし。此度貴下を此の航海に派遣するは、太平洋への通路を成就せしめんとするがためなり。

探檢隊の出帆

千八百四十五年五月二十六日、フランクリンは、百二十九名の船員を引率し、成功か然らずんば死を期すとて出發した。糧食は千八百四十八年七月分迄のものを用意した、氏は出帆後ホウエール、フイッシュ諸島 Whale Fish Islands から、千八百四十五年七月十二日付を以て、英吉利國海軍々令部宛最後の書面を送つた、然し此の書面は何等確定したる消息を齎らさなかつた。

探檢船最後の影像

エレバス、テロル兩船を最後に認めたのは、西暦千八百四十五年七月二十六日、ランカスター海峽を横ぎるため、中央の氷の中に出口の出來るのを待つて、北緯七十四度四十分、西經六十六度十三分の位置にあつた氷山の側に碇泊中なりしダンネット Dannett といふ捕鯨船の船長であつた。斯くしてフランクリンと其の探檢隊は、永遠に文明人の眼より消失してしまつた。ランカスター海峽は實際凍つて居らなかつたに相違ないが、ウォーカー岬への進行は、バロー海峽の氷塊が危險であつた爲めに不可能となつたから、止むなく、フランクリンは、ウエリントン海峽 Wellington Channel に進入した。これが西暦千八百十九年にパーリーに依つて、北方への出口として漸く知られて居つた處であつた。フランクリンは、ベルチャー Belcher の外は、其後何人も達せなかつた程の高緯

度、即ち北緯七十七度迄行つたといふことは著しき成功である。ウエリントン海峽の北部に至る北極の海に於ける彼の大なる發見は、其の成績が不明である。然し、フランクリンは、コルンワリスランド Cornwallis Land の西部に沿ふて南方へ歸つて來た、此の事實はこれが島であることを證明してゐる。

氷塊の工合で、此の時間に於ては更に進むことが出來ないのでエレバス、テロルの二船は北緯七十四度四十二分、西經九十一度三十二分のビーチー島 Beechey Island に於て、冬營をすることゝなつた。海岸に觀測所や仕事場を作り東と北とには樵旅行を實行し夏になつては、畑を耕すこととさへやつた。此處で一行中の三人が死んだ。間もなく氷に口が出來て進行の機會が來たので、大急ぎで探檢隊はビーチー島を出發した、大急ぎでと云ふは何の記錄も

殘つて居ないからだ。

進路の不明

ウオーカー岬より先のフランクリンの進路は不明である、プリンス・オブ・ウエールスランド Prince of Wales Land の西、マクリントク海峽 Maclintock Strait を通過したといふ人もあり、又ピール海灣 Peel Sound に入り、ノース・ソマーセット North Somerset とブーシア Boothia の西岸とに沿ふて、フランクリン海峽 Franklin Strait を航下したとも云つて居る。孰れの場合にしてもヴイクトリア海峽 Victoria Str. に到着し、二艘の船とも、千八百四十六年九月十二日、キング・ウヰリヤム陸 King William Land の十二哩北なる北緯七十度五分西經九十八度二十三分の處に出て氷で圍まれた、既知の海より九十

哩以内に迄來たのだから、北西航路も殆んど成就したのだが、此の位置は、フランクリンに必ず大なる心配を與へた。夫は船が兩方とも進行不可能であるのに、秋も已に過ぎ去つたからである。

ブーシア附近の探檢

西暦千八百四十六年より四十七年にかけての冬は、別に大した不幸もなく過ぎ、翌年の春と共に、フランクリンは附近の未知の海岸を視察した。彼は先づ第一に、嘗て西暦千八百三十年五月二十九日、ロッスの探檢したポイント・ヴイクトリーPoint Victoryと、同千八百三十九年八月二十五日、シンプソンの到着したケープ・ヘルシエルCape Herschellとの間に横はれる、キング・ウヰリヤム・ランドを探檢した、フランクリンが、ブーシアの西岸で船が氷の爲めに進退の自由を失ひ、極旅行を企てて居る間に、レーRaeは、ブーシア半島を探檢し、西暦千八百四十七年四月十八日、フランクリンの所在地より百五十哩以内の或る點に到着した。中尉ゴーアの引率したフランクリンの極旅行隊の一つが、西暦千八百四十七年五月二十四日、エレバス號を出で、六月ポイント・ヴイクトリーに達し、同千八百三十一年ロッスの紀念塚に一の書類を遺して去つた。此の書類は、西暦千八百五十九年、マクリントックの一行に發見せられた、これが西暦千八百四十五年より千八百四十七年に渉る探檢の唯一の記錄である。

唯一の記錄

西暦千八百四十七年五月二十八日、エレバスとテロルの二船

は北緯七十度五分西經九十八度二十三分の氷の中に冬營す。千八百四十五年より四十六年ビーチー島に於て、北緯七十四度四十三分西經九十度三十九分十五秒に冬營す。其の前ウエリントン海峽に入り北緯七十七度に達し、コルンヲリス島の西側を通過して歸る。サー・ジョン・フランクリン氏此の一行を指揮す、一行皆無事、士官二人水夫六人より成る一隊は、千八百四十七年五月二十四日船を發せり。

中尉　ゴーア、
運轉士　ウークス

フランクリンの死去

西暦千八百四十七年六月十一日、フランクリンは終に氷園の中に、あり、し、エレバス號中に、於て、疾の、爲、め、に、不歸の客となつた。彼の北西航路の搜索は終りを告げた。彼の死去は、英吉利本國なるウエストミンスター寺院に於ける紀念の石に、詩人テニソン卿により、長く歌はれて居る。勇士の末路は愍れであるが、また本望で名譽である。フランクリンの死去の後は、指揮の任務はクロージヤに移つた、然し、附近の海岸を探檢し、土人と交通を開き、其他の地方の富源を開發し、退却の航路を偵察するに如何なる手段を採つたかは不明に屬して居るが、船を見捨る準備の出來たのは恐らく氷の隙が出來ざる內に千八百四十七年の夏も過ぎた頃であつたらう。食物は千八百四十八年七月迄の分しか無かつたから、自然日々の食糧を減じたであろうし、又一方では身体を思ふ樣に活動させることも出來なかつたらうから、三年目には病氣の爲め

死者を生じ、既に退却する前に二十四名も死んで、其の中には士官等も多くあつた。

一行探檢船を見棄つ

西暦千八百四十八年迄に船は元の氷園の場所から西南の方に十九哩流れて來た。クロージャは船を捨てゝバック河 Back River に向ひ、ポイント・ヴイクトリアに上陸し、千八百四十七年ゴーアの遺せし記錄を持ち來りて、其の餘白に左の如く書き加へた。

千八百四十八年四月二十五日

テロル及エレバスの兩船は、千八百四十六年九月十二日以降、氷に包圍せられたり、本年四月二十二日終に之を廢棄せり、士官以下船員百五名はクロージャ大佐の指揮の下にあり、一行は

北緯六十九度三十七分四十二秒、西經九十八度四十分の地に上陸す。此の記錄は、千八百三十一年サー・ゼームス・ロッスの作りたるものと想像せらるゝ紀念塚より、中尉アーヴイングの發見する所となる、此の記錄は千八百四十七年六月故ゴーア氏の遺せしものなり、サー・ジョン・フランクリン氏は、千八百四十七年六月十一日死去せり、本日迄我が探檢隊中死亡せしもの士官九名水夫十五名なりとす。

エス、アール・エム・クロージャ
ゼームス・フイッツゼームス

出發の筈

尙明二十六日バックス・フイッシュ河 Backs Fish River に向つて

探檢隊一行の全滅

キング・ウイリアム・ランド附近の限られたる區域内に於て、如何にして百五名の人間が消滅したかは、實に著しき出來事と思はれる。三回の冬は慥かに彼等の健康を損つたに相違ない、クロージャの一行中には瀕死の狀態に陷つて居た人間も尠くはなかつたろう、又壞血病の初期のものなども多かつたらう。クロージャは北極探檢隊の指揮者に特有なる決心を以て、極微かな望みでもある間は、彼の部下を健康者も不健康者も、之を集合して置いたといふことは疑はない。而して『出來るものは自分で助かれ』といふ樣な悲慘な叫聲を發した樣子は聊かも見えない。

バックス・フィッシュ河へは、二百五十哩以下では、クロージャが進む筈はない、西曆千八百五十九年、マクリントックの周到にして大仕掛けの搜索にも拘らず、彼等の進行は精確には知られない。エスキモー人を使用してやつた搜査は、千八百六十九年、ホール Hall の努力や千八百七十九年キング・ウイリアム・ランドに於ける、シュワッカ Schwatka とギルダー Gilder の夏期屯營中の著名なる搜索によりて充分確められる。

クロージアーの一隊は、キング・ウイリアム・ランドの西海岸に沿ふて焦り行く間に、彼等の運命は、一日は一日より明瞭になつて來た、此の不毛の陸地の南端に近づいた頃は、恐らく糧食は盡きたであらう。或る一隊は船に立歸つた、なぜなら、船が沈み又は岸に打上げる前であつたが、エスキモー人が船中で一人の屍体を見出したといふからだ。又エスキモーの一小群と退却する一行

中の者に出遇ひ、共に屯營したものもあつた。然しぐず〳〵して一所に居ては白人等と運命を共にせねばならぬと思つてか、土人等は竊かに逃げて、白人等を置去りにした。墓と骸骨とにより考へて見ると、退却の行程はポイント・ヴイクトリアよりキング・ウイリアム・ランドの南のトッド島に到つて居る。又或るものはポイント・オグル Point Ogle へ、或るものはモントリオール島 Montreal Island に到着したと信ずべき理由もある。然し總てが死んだのは、病氣の爲めと餓のためだ。

彼等は皆勇氣と忠實とに富み、死に遭遇するまで共同一致したことは爭はれない、エスキモーの一婦人が、マクリントックに、『彼等は歩きながら倒れて死んだ』と云つたのは、彼の女の理想たる体力の功績に對する最高の贊辭であつた、是はマクリントック自身が親しく見た一骸骨の姿勢でも證據立てられる。リチャードソンの云ふ通り

是等の勇士は、最後まで忠實に、其生命を犧牲にして北西通路の最後の鏈鎖を鍛へ上げた。

フランクリン捜索隊と其の探檢

フランクリンの一隊が西暦千八百四十五年七月二十六日捕鯨船と邂逅してから、其の消息が無い、本國を出帆してから約二年で歸國する筈であるのに、少しも消息が判明しない、本國では皆心配を始めた、仍て陸上と海上と兩方面から此の一行の救助捜索に從事した、其の内でも大西洋上に於けるものが最も著しい。サー・ジエームス・シー・ロッス Sir James C. Ross の捜索隊は、西暦千八百四

十八年より四十九年にかけて活動したが成功せぬ。同千八百五十一年の春、此の捜索問題が英國に於て段々八釜敷論せられた結果、同國海軍々令部も船を出す、一般の同情者も、亦米國も、又フランクリン夫人自身も船を出すといふ大袈裟なことになつて來た。總計で十隻の數であつた。是等が皆殆んど同樣にウエリントン海峽の東口に到着した、其の結果は想はしくなかつた。此の年八月二十三日ケープ・リレイとビーチー島で歐羅巴人の遺物らしきものを發見した、其の後八月二十七日に、フランクリンの率ゐし探檢隊に屬せしエレバス號とテロル號との船員三名の墓をビーチー島で見出した。其の後幾多の捜索船は或は骸骨などを見出したことは度々あつたが、フランクリンの最後に就ての精確なことは終に分らなかつた。唯序に云ふが、是等の捜索隊に投じた英國政府の軍艦派遣費用は眞大なものだが、私の團体として費した金だけでも、ざつと三十五萬圓もかゝつた、其の内大部分はフランクリン夫人自身の金であつたといふことは實に著しき話だ、夫の事業に自分の赤心を献げた一美談である。

斯の樣に英米の官民共に力を併せて捜索したが更にフランクリンの消息が分らない、是より前にレーが悲しき報告を得て歸つたが、同夫人は更に西暦千八百五十七年フォックスといふ船を艤しサー・レオポルド・マックリントックを指揮者として捜索の爲に派遣した、マックリントックは數多の困難を凌いで翌年四月七日漸くビーチー島に達し、夫人の苦心に成れる紀念碑を建設した、翌年ウイリヤム・ランドに達し、前に記せし日記を得てフランクリンの運命を知るに至つた、然しながら其の遺跡は永久に見當らない、

實に其の最初より十一年目であつて其の費用も合計一千餘萬圓であつた。これは今から五十年も前の金高であるから、今日のそれに比較したなら大へんの高になる。

然しながら、これ等の捜索隊派遣の結果は、大にこの方面の研究を發達させ、地理學上に及ぼした効果は重大なものである。

北西航路通過

其の後ノールウェー國人のアムンドセンは、西暦千九百一年即ち明治三十九年八月に些の支障なく終に北西航路を通過してベーリング海峽に出づることが出來た、これが船舶によつて初めて此の難關を通過した先登者であるが、これは以前に拂はれたる犧牲者の賜であるといはねばならぬ。

四　ノルデンシヨルドの北極探檢

探檢の動機

北東航路の成功者**ノルデンシヨルド** Nordenskiold は、スエーデン人である。氏はフインランドに生れ、鑛物地質の學に精しき人であつた。西暦千八百六十一年頃から、屢々探檢に從事して次第に世に知られた。同千八百七十五年及其の翌年には、エニセイまで二回航海して、カラ Kara 海が氷のために閉ぢられぬのを見、又シベリヤのオビ河 Obi とエニセイ河 Yenisei との水の流勢によつて、北東航路を通過するは、敢て難き者でないといふことを悟り、西暦千八百七十八年即ち明治十一年に愈々此の探檢を決行することに定めた。

探檢の準備

探檢の費用は、總計凡そ十萬圓とし、內六萬圓はゴーデンブルグの豪商ヲスカルジキン氏より、一萬五千圓は瑞典國政府より、一萬二千五百圓は同國皇帝より一萬二千五百圓はモスコーの豪商アレキサンドルシベリャコフ氏から之を受けることとなつた。

探檢船はウエガ號として　獨逸のブレーメンにて西暦一千八百七十二年に新造したる捕鯨船で、長さ百五十尺、幅二十七尺、木製三本マストの小船で總噸數凡四百噸ある。ウエガ Vega とは北天に現はる丶光輝ある織女星の名である、前途の光明を意味する。

ウエガ號の出帆

同船は西暦千八百七十八年の七月四日、ゴーデンブルグを出帆し、トロセーで小蒸氣船レナ Lena と會し、七月二十四日同港を出帆し、同三十日シュゴル水道に達した。此處で汽船フラゼルとエキスプレスの二艘に會し、カラ海を過ぎ八月七日、四艘共エニセイ河口に達した。

カラ海の横斷は、大變都合好く行つて僅かに氷塊に出遇つた許りであつた。レナ河口で、フラゼルとエキスプレスの二船は、其の載せて居た石炭をウエガ號とレナ號とに移し、此の大河を溯つて種々の任務を果たし、秋に至つて歐洲に歸る豫定で別れた、果して豫定の通りであつたことが後に判明した。

エニセイ河口を發して

氷の海に突進す

これ迄は總督ノルデンショルドの通過した海路であるが、これからは總督も誰も全く不知案内の航路となつた。十月十日に本船とレナ號とは錨を拔き注意に注意を加へて進んだ、沿岸には一の氷塊も浮んで居らぬので初めは安心して居つたが、ビランナ河口外に達した、その翌朝になつて、濃霧がはげしく起り、とても進航が出來ぬから、とある島陰に投錨した。此の島には、嘗て露西亞の探檢隊長ミンニンが、小船に乘つて來た事があるから、總督は之をミンニン島と名けた。

氷塊と鬪つて漸くチエリユー

スキン岬に達す

十月十一日、兩船は汽力を充分にして進んで行つた、夜になつて、多少氷塊に出遇つたけれども、何の危難もなかつた。翌十二日の夕方になつて、海上一面の氷となつて、何れの方にも進むことが出來ぬから、止むなく逆戻りをして。翌十三日本船はレナ號の先になつて、徐々に進行した處が、霧の霽れ間からすぐ目の前二十五間の處に陸地を認め、驚いて投錨した。午後になつて、霧が全く霽れて、船は長い海峽の間に在つた、進むこと一時間で氷塊に密着し、二十四時間許り漂流した。十月十四日、アクチニアとは此の近所に極めて多き海藻の名を海門に着いた。アクチニアとは此の近所に極めて多き海藻の名を探つて命名した者である。

此處で小蒸氣船を下して、タイミル Taimir 海峽を檢べた所が、結氷は無いけれども、淺くて本船の進めぬことが、判然した。暫らく經て、北方の氷が全く破れたから、十八日にアクチニア港を出帆した。其の翌日、何等の支障なく、チエリユースキン岬 Cape Chelyuskin に達した。

其の北方數里の間は、海水が皆結氷して航海することが出來ぬ樣に見えたが、沿岸に一水道のあるのを見つけて、是に由て舊世界の極北點に接したる一小港に着くことが出來喜び極つて祝砲を發した、海若も驚ろける砲聲に驚いたことであらう。これ北東航路の目的たる其の一半に成功したものである、喜悅祝福の聲滿船を壓し、手の舞ひ足の踏むを知らぬ程であつた。一行の本國を出帆せんとするや、外圍の人々は、異口同音に、君等は決してチエリユースキン岬まで達することは出來ぬと豫言した、今其の豫言を反古にしたのである、一同の喜ぶのも無理はない。因て此岬の一地點に石を積み上げ、中央に流木を建て、目標となし、是迄の旅行記事と今後の目的とを書いた書物を錫の筒に納めて石の下に埋めた。せめて萬一の紀念にもと。

嗚呼チエリユースキン

チエリユースキンは其の名の有名なるに係らず、此の土地には何等の面白味なく、溪間には積れる雪が地面を被ひ、開いたる地には草花が極めて稀れに且寂しげに開いて居る、其の有樣は露西亞本國の北と殆んど變りがない。嘗て露西亞のミンニン氏が、エニセイ河から東に向ひ、此の海岸に沿ひて進航しやうと試みた、丁

度他の遠征者がレナ河から出帆した、即ち何れも露西亞の海軍將校である、其の一人はラシイニユースでイルクーツク號に搭して東方に向つて航海し、ベーリング海峽とカムチヤツカに達せよとの命令を受け、又、ブロンチスチエフはヤクーツク號に搭し、岸に沿ひ西の方に進んでエニセイ河に進入した。此の行動は信ずることの出來ぬ程澤山の危險を冒した。ブロンチスチエフの方は亞細亞の極北に近き北緯七十二度二十六分の地に達し、氷の爲めに餘儀なく引き還したが、今迄餘程に心身を疲勞せしめた結果後幾日も經たずして、終に斃るゝに至つた、氏と共に數多の危險を冒したる貞操忠實なる妙齡の妻女も、其の後八日を隔てて夫の後を追ふた。そこで船の指揮は士官中の首席なるチエリユースキンの手に落ち、一先づレナ河に引き還した。翌年ラプチーフの號令の下に

各自勇を勵まし、二度まで亞細亞極北に達せんとしたが成功しなかつた。千七百四十二年の春、チエリユースキンが今度は方針を變え、橇に乘つて沿岸を進み、終に此の地點に到達して名を不朽にとゞめた。

プロンチスチエフ夫人は、妙齡の身を以て、夫と共に極北無人の地に到り百難を排して夫の事業を助け終に夫と共に極北の鬼となつた、其の志や嘉みすべく、其の最後や實に愍むべきものではないか、我が國、中上流婦女の多くが、常に一室に閉居し、一歩を出づるも車馬により、一寸と小舟に乘つてすら、船暈を感じて死人の樣になるのに較べたなら、其の差は隨分はげしいではないか。海國男兒の母大探檢家の母は、どんな心懸けが必要であらうか。

レナ河口に達す

十月二十日には、本船とレナ號とは共に前方に進むことが出來た。總督は此の點から眞直に東に進んで世界未知の海洋を調べようとしたが、大なる流氷が多く、とても進むことが出來なく、數日間漂流して再びタイミル半島の東海岸に引き還した。此處で始めて粉の樣な細かな雪が降るのに出會つた、降るといふよりは寧ろ風が横に運んで來るのである、瞬く間に滿目白皚々の銀世界となつた。然し海は閉ぢなかつたから、帆と蒸氣とを用ひて、二十四日にハータンガ Khatanga 灣に達し、暫く灣口の小島を視察した。此の小島はプレヲラプヒニアと呼び、無數の鳥が棲んで居た爲め、想ひがけなく、大なる獲物があつて、次の日の食卓に溢ふるゝ程

であつた。これから岸に沿ひ、僅かに開いて居る水道を進み、十月二十七日の夕方、レナ Lena 河に安着した。伴れて居た所のレナ號に家郷へ通信を托して分れを告げた、後に聞けば、一ヶ月の後ヤクーツクに歸つたさうである。

危險なるスヴィアトイ岬を過ぐ

次で總督は新シベリア New Siberia 諸島の南端を過ぎ之に立寄る積りであつたが、霧は深く氷は厚く、其上海水が淺く、時日も亦許さぬので、之を斷念し、三十日の夕方、スヴィアトイ Sviatoi 岬を過ぎた。

此の岬は甚だ危險の地として知られて居る、以前の旅行家は、誰でも此處に來たときは、みんな厚き氷に出遇つた、前に記した

ラシニウスなどは、レナ河から東の方に進まうとしたが、結氷に妨げられ、終にセルラック河口に越年することゝなり、其の冬、乘組員は壞血病に罹つて死亡したものが多く、翌年の夏迄には總員五十二名中、生殘つたものは僅かに九人であつた、ラシニウスも亦此の北極病の犧牲となつた。其の後を受けてテメットリウスラプチーフは、次の年に四回とも此の通過を試み、漸くコリマ河Kolymaの口迄行つたが、これから東には迚も行けなかつた。斯の樣な危險な岬であるが、一千八百七十八年の十月三十日は、何の幸か、毫も困難なく安々と通ることが出來た。尤も新シベリア諸島の南は海上一面の氷野であつたが、是とスビアトイ岬との間に一條の水道があつたから、ウエガ號は何の障りなく東に進むことが出來た。

十一月三日、コリマ河口なるベーア Bear 諸島に達したが、氷は隨分厚かつた、翌朝はとても氷のために東に進むことが出來ぬ、それ故、七日迄氷と戰ひつゞけた、同日の夕刻になつて、漸く一つの水道に達し、安全に東に進むことが出來た。

ウエガ號全く進む能はず

其の後海面の氷塊は益々多くなり、或る時は全く氷の包圍攻撃を受け、或る時は鐵製の船首で氷を突破つて進んだが、數日の間に僅に一里程しか進行の出來ぬこともあつた。

同月二十日から二十三日迄て、コリマの西の氷海の中で時日を費した、其の後、再び進行することが出來たが、又其の東の二里許りの處で、地盤に固り着いて居る大氷塊に固着し、二十六日の

夕方漸くコリユースキン灣 Kolyuskin に達し、ジンレッドレン岬に投錨した。翌々廿八日には此の岬の東一二里の處なるツングース人の村落ピトレカイ Pitrekai の沖に碇泊した。此の場所は、ベーリング海峽とは百二十里しか離れて居ない、此の時、北風は斷えず吹き、氷はどん〳〵やつて來る、とても船を出すなど想ひもよらなくなつて、終にこゝで冬營することゝなつた。

ツングース土人の生活

已に陸地と船との間は全く氷の鎖す所となつた。此の地の土人もツングース族である、日として船を訪問せぬことはない、彼等は常に海に漁し山に獵し、純然たる遊牧民である、海豹と馴鹿とは彼等の美食である、彼等の家は天幕であつて高さ一間幅七八尺の者で、其の中に十數人の家族が集まつて居る。

天幕内は甚だ溫いが甚だ臭い、彼等は此の内では殆んど裸體で居る。彼等が雪中進むには常に犬橇を用ゐるが、これは彈力ある樺の木で製し、一本の釘も用ゐずに海驢の皮の紐で之を組立る、橇は數頭から十數頭の犬に之を曳かせるが、實に速いものだ。此の邊に凡二千戸ばかり住つて二人の酋長が之を支配して居るが、此の酋長は、露西亞國の命を受けて定期の市で市場稅を取り立てゝ居る。

冬營中の事業

十一月の末、氷の厚が五寸位になつた頃、海邊に地磁氣の觀象臺を造り始め、十二月中に全く落成した。これは空氣の狀態と、

磁石力の觀測をなす目的である、觀象臺は船から一哩ばかり離れて居るから、其の間の道には、澤山の氷の柱をならべ、柱と柱との間に一條の繩を張り、暗黑の夜も往來する爲に都合よくした。

觀測者は六時間交代で十一名が各當番する事となつた。

觀測臺は、成るべく愉快にする方法に力を盡し、寢具なども護謨製を用ゐた。室内の溫度は華氏寒暖計の氷點下二十度よりも上ることは少なかつたが、觀測者は毛皮で五體を包むときは、よく眠ることが出來た。暗夜や嵐の時には、すぐ眼の前も見えぬから船との間を行くに二時間もかゝつたことがある。寒さの強にはげしき時、風に逆つて歩くには、衣類で自分の顏面を掩はなければならぬ、顏面を掩へば前が見えぬので歩けない、又常に身體を動かし、手で頰を撫でゝ暖めなければならぬ、さもなければ、身體が凍つて目が塞がるからである。

ウエガ號では、これから如何にして冬を過すかの準備に取りかゝつた。船室や前甲板には常にストーブを備へ附けた、機關室や中甲板も其の通りにした、これがため船内は暖くて、食糧品貯藏の船艙でも、溫度は氷點以下に降ることはなかつた。船室、前甲板、食堂などは華氏の十六度から二十度位の間であつた。上甲板には深さ一尺位の雪の貯藏所を設け、煙突から前の方には天幕を張つた、中甲板は奇麗に掃除して集合所とし、此處で日曜毎に禮拜式を行ひ祝宴も亦此處で開くことにした。耶蘇降誕の夜は大に燈火を點じ、船内擧つて祝木を周つて舞踏した。此の晩ほど愉快な時はなかつた。

天候の不穩の時は、空氣や磁力を觀察する外、何の仕事も出來

ぬから、讀書と室內遊戯などで日を暮して居つた、書物の多くは總督の賜ものであつた。

三月になつて、太陽が漸く地平線上に現はれた、無明の闇も遂に開けて來た、闇黑世界は光明ある天地となつた、一同勇みに勇んで、犬橇に乘つて徘徊した。ッングースの村々を訪問し、其風俗習慣などを知らうとして、一面識なきむさぐろしき土人と數日間雜居したこともあつた。一同の冬營をやつた近所のビットケー村の土人は、漁業の目的の爲め全村擧つて東方に移住した。

氣候

風は常に北の方から吹いて來るが、一月に一回位は方向を變へて二三日間南の方から吹き續くこともある。この南風の吹き來る時は、劇しく溫くなり、北風となつて急に溫度が下る、北風には隨分勢の強いものがあつた。

氣溫高低表（華氏）

月	平均	最高	最低
八月	三一·〇〇	一二·〇〇	(−)〇·〇〇
九月	〇·〇〇	六·〇〇	(−)四·〇〇
十月	(−)五·〇〇	〇·〇〇	(−)二〇·〇〇
十一月	(−)一七·〇〇	(−)六·〇〇	(−)二七·〇〇
十二月	(−)二三·〇〇	一·〇〇	(−)三七·〇〇
一月	(−)二五·〇〇	(−)四·〇〇	(−)四六·〇〇
二月	(−)二五·〇〇	〇·〇〇	(−)四三·〇〇
三月	(−)二二·〇〇	四〇〇	(−)三九·〇〇

南極と北極

四月	(一)一九・〇〇	(一)四・〇〇	(一)三八・〇〇
五月	(一)七・〇〇	(一)一・〇〇	(一)二六・〇〇
六月	(一)一・〇〇	六・〇〇	(一)一四・〇〇
七月	五・〇〇	一五・〇〇	(一)一・〇〇

日が長くなる、暖氣も次第に加はつて來る、船室外の仕事も出來る樣になつて來た、仍て氷中の仕事に取り掛り、厚さ七尺許りの氷を鋸で切り開き、船の兩側に數多の孔を開けた、船は丁度造船場のドックの中に在る樣に見えた。

五月の末太陽が極の上をぐる〳〵廻る時になつてからは、雪の融けることが速く、夏の半には陸地も海の氷も其の外套たる雪が消え去つた、けれどもそれは雪ばかりであつて、海や山の氷はまだ〳〵融けない、融けたる雪水は、澤山の小さき流れとなつて山邊を流れ下り、大きな池となり、又其の池から溢れて海に注ぎ込む、此の流水の一部は海の氷の上を進み、一部は其氷の下に沈みて、共に氷を浸蝕する、それ故に此の樣な流れがあると、海氷の中に忽ちに一つの海峽が現れる、又冬の中に海豹が氷の中に堀つた澤山の穴も、今となつては次第に大きくなり、遂に氷を打破る助けとなる。

南極と北極

嘗て南の方から强い風が暖き空氣を送つて來た爲めに、船の北方三四哩の處に海峽が出來た、此海峽……氷の間の海峽……は冬になつても一哩位の廣さであつた、春になつてから次第にてんな海峽が段々增し、其の各口の廣さも變つて來た。夏の中頃になつて再面の氷もすつかり開いて來た、唯ヴェガ號の附近四哩ばかりの海が、どうしたものか一帶に氷が殘つて居た。

ウエガ號漸く太平洋に入る

七月十八日、ウエガ號は漸く永き冬營の地を離るゝことが出來て、東方に進んだ、七月二十日午前十一時、マストに國旗を飜へし祝砲を放つてベーリング海峽の東岬 East Cape (C. Deshnef) を通過し愈々太平洋に入り込んだ。其の夜厚く廣き氷の墻壁と戰ひつゝ、セントローレンス灣 St. Lawrence Bay に達し、ツングース土人の部落の沖に投錨した。

七月二十一日の夕方には、已にベーリング海峽の亞米利加側なるクラレンス港 Port Clarence の北方のヨーク岬 Cape York を通過して、此のクラレンス港に繫泊した、此の港は、以前フランクリンが遠征の間、數隻の英船を碇泊させて居つた港である。

こゝ五日間の碇泊は實に樂しき逗留であつた、時候は漸く夏になつて地面は美しき草花に輝き、一行中の植物學者をして、夏の季節の短きを歎せしめた程である。一同の到着するや、鮭捕りに從事して居つた土人、エスキモー族の親切なる待遇を受けた。此の地にてエスキモーの荒布の天幕内に入つたのは、前のツングースの煤だらけの天幕に居つた一同のものには、急に土蠻から王侯の生活に移つた懷ひがする。物品は清潔である、敷物は美しくある、天幕も白色に輝いて居る。

ベーリング島の膃肭獸

七月二十六日、ウエガ號は學術調査の目的でコンヤン灣に進んだ、此の灣はセニヤウイム海峽から深く陸地に入り込むで居る、

此處で種々學術上の調査をやつた、此の時には氷がまだ海の底にあつたが、七月三十日には漸く溶解しさうになつて來た、ウエガ號も共に押し流されさうであるから、蒸氣を消し錨を投じ、或は急に船を進めなどして、漸くセニヤウイン海峽を出て胸撫でおろした、實に危險であつた、翌日セントローレンス島に達し、三日間、島の北西の方に逗留した、此の島の住民はエスキモー族であるけれどもツングース族と交通して居るから、よくツングース語をはなし、又風俗も互によく似て居る。

八月二日出帆して風波の烈しきベーリング海を南に走り、八月十五日、ベーリング島に達した。これは露西亞領でコンマンドル諸島 Commandor Is. 中の一島であるが、アメリカ人が稅金を納めて膃肭獸を獵して居つた。一同は此處で膃肭獸獵の仕方を見た、獵地はベーリング島の北に出張つた砂洲で、其處に殆んど三千の膃肭獸が居る、獵者は長い棍棒を揮つて彼等を陸の方に逐ひ上げ之を擲り殺すのである。此の獵は一年の中に凡そ二ケ月間許さるる、其の他の月は海獸保護の目的から許可しない。

膃肭獸は貴重の海獸である、其の牝は一年に一匹の外兒を生まぬから、餘程保護せぬと滅絕してしまう、今日では餘程少數になつて來た。我國の樺太の東岸なる海豹島、前に記したコンマンドル諸島と、ベーリング海に在るアメリカのプリビロフ諸島は世界の三保護地となつて居る。彼等は毎年夏の初めになると、以上の島陰の砂地に上陸して、其兒を生み、之を養育して居る、幾百幾千となく群居する有樣は、なか〳〵

愛らしきものである。此處は實に彼等の極樂淨土である、子供もだん〳〵大きくなつて、自由に游泳も出來る樣になると秋の寂しき日になる。我が海豹島では今は絕對に之が捕獲を禁じて居るが、アメリカと露西亞では之を許して居る、然し分娩後の夏の終り頃でなければ捕獲させない、又小兒や壯年のもの牝等は之を捕らせぬ樣にして、大きな牡をどし〳〵撲ち殺させる。これは一夫多妻であるから、牡を澤山殺したとて繁殖の妨害にはならぬ、然し決して銃殺は許さぬ。

秋になれば、彼等は此の樂しき天地を見棄てゝ南の方に向つて出發し、冬の間は溫帶地方の海上、島陰等をあさり、來年の夏に再び舊き故郷に歸るのである。

初めて故郷の消息を知る

始めて米國の新聞紙を得て故國の消息に接した。然し一行は終局の目的地たる日本の土を一日でも早く踏みたいのである。冬季の談柄は常に何時日本に行くことが出來るかといふのであつて、日として之を聞かぬ日はなかつた、くはしく本國の消息を知るも日本に行つてからのことである、日本に行くのは遠征隊の最大渴望であつたのである。

ウエガ號は、いよ〳〵九月二日を以て日本の横濱に到着した。十四個月間で北東航路の探檢を完成した、勿論一人の病者も出さずに。

ウエガ號と東京地學協會

ウエガ號が、九月二日横濱に安着するや、同十五日、東京地學協會、獨逸亞細亞協會、英吉利亞細亞協會が合同し、東京地學協會長　北白川宮能久親王首座の下にノルデンショルド氏以下の一行を迎へ、大歡迎會を開いた。當日

殿下は祝詞として

貴嬢紳士ニ告グ今宵招待シタル諸客ハ北東航路ノ發見者ニシテ鋭意倦マズ剛氣鐵ニ比スベク兼テ知識絶倫以テ能ク成シ難キノ事業ヲ果シタリ　蓋シ此ノ事業タルヤ數百年來許多ノ才力アル海客學者等屢々企テタレドモ曾テ其ノ功ヲ奏スルコトナカリシナリ

博士ノルデンショルド船長バランデルノ兩氏及ビ其ノ隨從ノ諸氏北方西比利亞ニ沿ヒ氷海ヲ周航シ北極地方ニモ亦處々貿易ヲ通ジ文化ヲ開クヲ得ル証アルヲ目擊シタリ抑其行ハ地理及學術ノ上ニ於テ大功アリテ永久ニ昭明ナルノミナラズ初メテ西比利亞北方及亞細亞ヲ内部ヨリ流出スル大河ノ通路ヲ實驗シタリ

ウエガ號ノ航路冬季ノ滯船ト前後遭遇セシ所ノ勞苦艱難トヲ察シ以テ從前ノ北極航海ト比較スレバ　啻ニ其ノ主謀者ノ聰明ニシテ能ク黽勉セシヲ感賞セルノミナラズ一歲半ノ航海中其ノ水夫ノ内ニ疾病缺乏ナク船体一ツノ損傷ナク箱中貯フル所ノ石炭亦未ダ用ヰ盡サズシテ我日本ニ到達シタル誰アリテ主謀者ノ功ト爲サヾラン　請フ共ニ此ノ貴賓ニ向テ其ノ成功

ヲ祝シ併セテ博士ノルデンショルド船長バランデル兩氏及其他諸氏ノ健全ヲ祝シテ盃ヲ傾ケンコトヲ　諸氏ノ益ヲ學術上ニ爲シ便ヲ世界ノ交通ニ與ヘタルヤ大ナレバ意氣揚々安全ニ歸國セラルベシ

博士ノルデンショルド氏ハ

此ノ遼遠ナル東洋ノ國ニ於テ學事ノタメニ黽勉スル三協會ノ懇接ヲ受クルヲ多謝シ其ノ日本ニ在ルノ間ニ於テ其ノ遠征ノ詳細ヲ陳述スル能ハザルヲ憾ムト雖モ此ノ廣ク行ハルヽ三國語中就レモ我ガ知ルトコロ長キ演說ヲ爲スニ足ルコトヲ信セザル旨ヲ述ベ協會ノ探究スベキ事ノ廣キヲ祝シ首座タル親王殿下ニ敢テ東京地學協會ノ日本人企起ノ北極遠征ヲ勸奬シ歐洲人ニハ北西遠征ト稱スル北西ノ針路ヲ取リ周リテ歐羅巴來ルコトヲ望メリ

東京地學協會は博士ノルデンショルド氏を名譽會員に推薦し、之に銀牌を贈與せり（口繪參照）

スウエン、ヘヂン博士をして大探檢家たらしめしものは日本なり

此の大歡迎は、直に歐米諸國に喧傳し、數多有爲青年學者を刺擊せしこと幾何なりしやを知らず、後年中央亞細亞の大探檢家となりしスウエン、ヘヂン博士の如き亦其一人也。博士は其の第五回の探檢にトランスヒマラヤを踏査し、招かれて來朝するや明治四十一年十一月十五日東京地學協會の歡迎式場に於て實に左の所感を述べたり。

……回顧スレバ西暦一千八百七十八年四月二十九日即チ予ノ小學校在學中故國ノ先輩ノルデンショルド博士其ノ北東航路を終ヘタル功ニヨリ貴協會ヨリ今日ノ如キ盛大ナル儀式ニヨリ銀牌ヲ授與セラレテ歸國セル際鄕國ノ官民狂喜シテ之ヲ歡迎セリ予ハ其ノ情況ヲ目擊シ益々亞細亞內陸探檢ノ志望切ナルヲ加ヘ彼ノ銀牌ヲ見ル每ニ常ニ激勵セラレタリ而シテ圖ラザリキ予今貴協會ニ於テ先輩ニ優レル盛大ナル歡迎ヲ受ケ且ツ銀牌ニ代フルニ金牌ヲ以テセラレントハ予ハ先輩ノ偉大ナル功績ニ及バザル遠ク然モ今日ノ優遇ニ接シ殆ンド爲ス處ヲ知ラズ……

實に日本の一擧はスウエンヘヂン博士を感奮蹶起せしめたり嗚呼大なる偉人は後世數多の偉人を生む、我が帝國の古英雄も幾多の新英雄を生んだ、學術界に偉人の出づるも近きことであらうと信ずる。

五、ナンゼンの北極探檢

北極の探檢で最も有名で最も大切であつた人はナンゼンであるたとひ北極星の直下迄は行かなかつたとはいへ、其の學術社會に與へた功績は空前である、之が爲めに北氷洋海底の大体も、海水の流動する有樣も氣象も生物も光學の現象も、先づ多少の光明を認められたのである、殊に此探檢につきては全く學術上の理論に基づき、其の豫想通りに行つたといふのが、面白き問題であつた。

(一)フラム號の航海

探檢の動機

從來の北極探檢は、北の方から絶えず流れ來る大氷山に妨げられるのである、單に妨げらるゝに止まらず、船は之に衝突して粉みぢんになつて、貴重の記錄や偉人の生命までも奪ひ去つたことも幾度かある、これが爲めには、フランクリンも他界の人となりヂアネットといふ探檢船等も海底の藻屑となり、一日も早やく、吉報をもたらせかしと望を屬して居る國民、絶大の名譽を擔ひ歸らるる日を指折り數へて待居られし妻子は、空しく北の空、北の海原をながめ、悲嘆にむせびし人も少なくない、フランクリンの妻君などは自ら船を出して十一年目に夫の消息を探しあてたといふ悲劇もある。ナンセンはこの悲境に遇はずに如何にして北極に達すべきや、其達すべき方法如何と考へたことは、一年や二年の事ではなかつた。

處が天は此の幸運ある人を見捨なかつた。西暦千八百八十四年今より二十年前に、彼のあはれ沈沒の悲しき運命に遇ひたる探檢船ジアネット號 Jeanet の遺物が發見せられたことである、此船は西比利亞の北なる新西比利亞島の北東で沈沒したるに係らず、其の遺物は千餘里も南西の方に離れて居る、グリーンランドの南西の海岸で發見せられたのである。沈沒船の遺物が、此の如く遠き處で發見せられたのは、何か其の間に理由がなくてはならぬ、どうしても、フランツヨセフ Franz Josef Land の北方の海を一直線に横ぎるより外に道路がないのである、若しジアネット船中の遺物が此の路を漂ひ來たとしたならば、氷の壓力に耐ふる船だにある

ならば、亦同一の路を通過すンことが出來るるのであるとナンセるは考へた。

探檢の方案

ナンセンは精しく此の附近の海を調べ、殊に氷の性質と之に伴ふて附着せる漂着物とに注意したが、研究すればするほど、西比利亞の北の方海のとグリーンランドの東岸の海の間とに、斷へず海水海氷の交通ある證據が、段々加はつて來て、西比利亞及北亞米利加の間なるベーリング海峽 Bering Strait から、北極の周圍の海を横ぎり、スピッツバーゲン Spitzbergen 及びグリーンドランドに出づる一定の針路に沿ひし流れがあつて、斷えず流動することを充分に信ずるに至つた、仍て特に氷海に適する船を造り氷を排して

進み、出來るだけ西比利亞の北に進み船を氷に鎖ざさしむるときは、その船は必ず同一の路を漂ふから、不明の此の地方を多少明らかにすることが出來るとて、千八百九十二年十月、英國ロンドンの地學協會で次の意見を發表して。

漂流の證據

一、常に西比利亞の漂木のグリーンランド海岸に運搬さるゝこと

二、確かに、アラスカよりベーリング海を通じて來れりと想はるゝエスキモー人の用具たる投棒がグリーンランドの海岸に發見さるゝこと

三、グリーンランドの東岸に沿ひ、南流し來る氷の性質を考ふるに如何なる流氷よりも宏大なり、此の如く巨大の

塊となるまで結合し旦累積するには永き時間漂流せりと謂ふを可とす

顯微鏡の判斷

アイスランドとグリーランドとの間の海峽を過ぎりて、グリーンランドの東岸を南流するはすべて茶褐色の塵と泥とが見える、これは西比利亞の外からは來ない、仍て、千八百八十八年グリーンランドに探檢を試みし際、此の塵と泥との標本を携へ歸つて、之をテルネボーム Tornebohm といふ地質學者に檢査して貰つた、處が氏は單に顯微鏡下の檢査ばかりで、直ちに說を立てゝ、多分廣大なる沖積地から來たもので、其の本元は大抵西比利亞であるだろうと斷言し旦此の塵の外に顯微鏡的植物の硅藻を發見し、之を其の方の專門家なるクレーウエ教授 Prof. Cleve に送つた處が、教授は此の標本の硅藻と、瑞典國の探檢船ヴエガ號遠征の際、ベーリング海狹の近傍ワンカレマ Wankarema 岬の沖にて、氷塊上より採集せし標本中の硅藻と全く符合し、且つ他の地方のものと全く異つて居る處から、此の東西一千里以上の海の間に交通がなくてはならぬとの考を出された。尙ほ硅藻の外淡水中に棲息して、當に西比利亞よりグリーンランドの東岸に旅行する動植兩生物の一團あるを發見した、仍て左の斷案を下すことが出來る。

以上の事實によれば、此の北極圈內には一の海水の流れがあつて常に西比利亞とベーリング海峽との間の方の海から、フランツヨセフ陸の北に行き、進んで、スピツバーゲンとグリーンランドとの間の海に、北極地方を横つて流れて居ると

認むる理由が充分ある、そうして氷の塊は、此の海水の流れと共に定まつた進路をとつて絶えず流動するものである。仍て海流の北流する處の新シベリヤ島の近所で此海流に乘り、出來るだけ北に進み、一直線に進行して、高緯度を横ぎる積りである、必ずしも北極に行くのが目的ではない、只少しでもより多く未だ知られぬ所を調べることを本旨とする。此の目的を達するには二個の方法がある(卷首地圖參照)

其一

船を極めて丈夫に造り、氷の強き壓力に耐えしめ、之に乘つて氷と共に浮游して横ぎること(從來の探檢船は此の氷の壓迫に耐えずして破裂した)

其二

端艇のみにより、氷塊上に野營をして其の浮游に任かせて横ぎること

予は此の第一の方法を採り、船の氷の壓力に耐へざるに於て始めて第二の方法を採る準備をなせり云々。

此の目的に適ふべき船を造らなければならぬ、これは幸ひにして有名なる造船技師ノールウエー國のコリンスルヘルと云ふ人が、全力を盡して之に當つた爲無類の良船が出來上り、之が爲め一の危險なく安全で愉快なる探檢旅行をなすことが出來ること。船にはフラム號の名を命じた云々。

此の大膽なる然かも學術的基礎ある大探檢の豫告に對しては、極地探檢の諸大家はその安全を氣づかひ、計畫中止を勸告するものもあつた、然るに幸ひにもノールウエーのストルチングはナンゼ

ンの望みに應じ、充分なる金額を支出するに決　個人からも數多寄附者があつていよ〳〵決行さるるに至つた。

フラム號北極海上に向ふ

西暦千八百九十三年（明治二十六年　六月二十四日）すべて準備が全く出來あがつた。仍て探檢船フラム號は、ノールッエー國のクリスチャニア港を發し、前途多望なる航路に上つた、七月二十一日には同國の最北東の港なるヴァルデー Vardö を離れて、北東なるノヴァヤゼムリア Novaja Zemlya に向つた、もう水と天との外は何も見えぬ無情なる大氷塊は絶えず侵擊して來る、進んでは止まり、止まりては進む、濃霧は時々やつて來る、右も左も前も後も殆んど一尺先が見えぬこともある、霧が晴れると、すぐ眼前に

山なす大氷山に出遇つてヒヤ〳〵したとも幾度か、數日間は全く船の進行を止めねばならなかつた。斯くて七月廿九日ユゴールYugor とて、ロシヤ國の北東ノヴァヤ・ゼムリア島の南なる海峽の南ハバロワ Chambarowa に到達してトル男 Baron Toll の寄せられたる三十四頭のシベリヤ橇犬を船に載せた。此處で瀝罐の掃除や其他の準備を爲し、石炭船ウラニヤ號を待合せたが、期に遲れたから止むを得ず之を見棄てた、即ち八月三日の間に準備が出來たから、ここまで來た書記クリストフエルセン Christoffersen と袂を分つた、見送らる人も送る人も、共に涙てそなけれ無限の情に滿ちたことであつたろう。

ナンセン自ら水先案内を爲す

船の將に錨を拔こうとする時しも、霧が連りに襲ひ來て、咫尺も分らぬ。然し何時霽れると云ふ見込はない、時期は次第にせまつてくる一時瞬時を爭ふ際である、大膽なるナンセンは、自分から一人の助手を引つれ小さき石油小蒸氣船に乘つて水先を測りつつ、無事に本船を海上に導びいた。翌朝ユゴル海峽を離れて人の恐れたののくカラ海 Kara Sea に入り込むだ、氷は遠慮なく攻めて來た、見渡す限り前も後も氷の水氷の海、漸く陸に近く一條の通路を見つけ出し、進んでヤルマル Yarmar 半島に達した、此所で全く、氷に閉ぢ込められ一寸も前に進めぬ、實に八月六日のことであつた。一行は、仕方がないから氷の開くのを待つに決し、其の間上陸して、植物採集や地質調査や、土地の測量などをやつた。海岸線は半度西に偏れるを發見して從來の地圖を訂正した。

人類との永き袂別

此處に居る間にサモア人が船に來たから、之を優待して、ビスケットや、其の外の物をくれてやつたら大變喜んで去つた、これが全く人類との最後の別れであつた。八月十二日に氷が漸く少しく開いたから出帆し、十三日にはヤルマル半島の北の角で幸にも氷のない水上に出た、やれ安心と胸なで下す間もなく、頑固なる北東風は、何の遠慮もなく吹き起り、其の強さは兎ても話にも筆にも寫せぬほどであつた、已を得ず、斜に風を受けつゝ、東に向つて荒波をしのぎ行くと數週間、風の荒き時は、必ず寒さが嚴し、く、朔風肌を裂く位の形容詞では兎ても言ひ盡せない。

エニセイ河の北西に向ひ進行中、或日突然一の陸地を發見した、仍てこれにスヴエルドルップ Sverdrups Island の名を附けた（同行者中の一人の名）。船は其の夕方ヂクソン港の濱邊に着いた。此處で故郷に送る書狀を遺して、英國のエニセイ江遠征隊のウイギンス艦長に賴む豫定であつたが、時間の許さぬ爲空しく出帆した、遺憾至極であつたろう。

氷河遺跡の發見

シベリアの沿岸を東北行する間に、絶へず新島嶼を發見した、のみならず、これらの海岸は以前の地圖と大いに異なつて居て、深くきざまれたる狹き入江があり、前には岩礁や島嶼が列を爲し山はさまで高くなくとも、入江はさまで深くなくとも、恰かもノールウエーの西岸や、英國スコットランドの西岸の如く、其の成立上、氷河の浸蝕を受けたことは明らかである。これに由て見ても、此の附近は過ぎにし地質上の昔は、全体の地面が氷雪の爲めに被はれ、これが凍つて大なる厚さとなり、其の谷合にあるものは、極めて靜かなる歩みを以て沿岸に進み來り、次第に其の兩岸や床を削つて、深き谷を作つたものであらう。尤もシベリヤの寒かつたのは、今日、マンモースと云ふ巨象の牙や骨や乃至は皮や毛のある、さては肉の生々しきものが出るのでも分る、當時の寒さは、とても今日と比較にならぬ程であつた、尤も斯く寒き時代は、今の學者が氷河時代と稱へ、嘗ては歐羅巴や北アメリカの大

部分も全く氷雪の包む處となりし事四回あつたと言つて居る。我日本の國でも西比利亞の北で見る樣な巨大なる象の遺骨が三四の處から出たのに見ても、大分寒かつた時のあつたのは明らかである。

尙ほ他にも氷河期の遺跡が發見せられた、それは八月二十日、キエルマン島 Kiellman's Island の一に上陸して、熊馴鹿各數頭を銃殺したる折、此の島にても、シベリアの海岸に在る如く、明瞭なる氷河期の遺跡を發見した。仍て、昔は頗る廣き亞細亞內地の氷が、北シベリヤの全部を被ひ、此の島まで氷河が續いて居つたのは爭はれぬ事實である。また、ヤルマル半島から、チエリユースキン Chlyuskin の東に至るまでの海邊は、何處でも上陸する每に氷河の運び來つた堆石の沈積物が堤防の樣になつて居るのを見出し恰も、ロシヤ國のフイランドあたりに在るものと同一の遺跡を發見し、又岩石の處々に爪でかいた樣な、氷河特有の抹條の跡あるを看出した。

フラム號氷塊と鬪ふ

此處より進まうとする際、怒れる風はいやが上に暴れまはり、雨さへ激しく加はつて來た、其の上に、逆まく海水は船を押し流し、海中には岩礁が多くして、且つ淺瀨は數知れぬ程ある、其の危險さは一通りではない、船長は一寸もブリッヂを去ることかなはず、水夫も一歩も其の持場持場を動くことはならなかつた、八月二十四日になつて、始めて暴風も海水の逆流も共に止んだ、然し、やれうれしやと喜びしは束の間で、尙强き逆風に反抗しつゝ

八月二十七日にバランダー岬 Cape Palauedre に達し、此の夜、ノルデンショルドの命名せるタイミル島 Taimyr とアルムキスト Almquist 諸島との中に連續せる陸氷の爲めに前路を遮られた。仍て其の北に向つて通路を索めたが、別に一續きの島があつて、遠く北に續いて居るのを發見し、漸く嶋の北の端まで行きついた所、此處も亦一面すき間もなき大氷塊で、如何ともすることが出來ぬから、もと來し路に引き返した、島と島の間も氷で之を連ねて居る。百計盡きて空しく待つより外はない。けれども、此の如き事は每々豫期せる處である、極地に至るには、まだ〳〵大なる困難、苦痛や心配は山なす程である。彼のノルデンショルド氏が、千八百七十八年即ち明治十一年の八月中旬、已に水中全く氷の無かつたといふ處で、止を得ず、冬籠の準備に取かゝつた。所が何の幸か、大

暴風が吹き起つて氷を粉碎し、九月六日に再ひ進む事が出來た。昨は此の暴風雨をうらみ、今はこれに感謝せざるを得ぬ、何等の輪廻か。斯くて所謂タイミル灣を横ぎり未だ半分も行かぬのに忽ち陸に着いた、此の灣は普通の地圖に書いてあるものよりも大變に狹く形も異つて居る、これから北に向ひ、チエリーユスキン岬に進んだが、九月七日密閉せる氷で止められた。

翌日八日チエリユースキン Chelyuskin 半島に上陸した、此の地は大部分は粘土の大平原で、其上に花崗岩や班岩其他の岩石が散轉して居る、亦此の處で內地に向つて遙かに廣がりたる喇叭狀の河口を發見した。

時機を失する虞ありて橇犬を塔載する能はず

九月九日、再び北進して數多の新島を發見しつゝ、チエリユースキン岬以西の海上を進み、翌日同岬を過ぎ、其の東方で亦氷の爲めに止められた。此の氷はタイミル半島の東岸まで續ひて居るから、船は南に向て此の氷に沿ふて進む外道が無い、とう〳〵アナバラ nabara といふ河口の近所に至り、十五日にはオレネク Orenek 河口の前方に達した。此處には二十六頭の優れたる橇犬が一同を待つて居る。これもトル男の賜ものである。東シベリヤの橇犬は西シベリヤのものよりも、世界の何れのよりも更に優等である。此等の犬は此の旅行にとりては、どの位有力であるかわからぬ。然るに遺憾なことは、河水の淺さと時季の遲きとで河に入ることが出來ない。萬一船を淺瀨に乘り上げたならば、再ひ浮び出づるに數日を費やし、其の内に冬となり、全一年氷の中に閉ざされることになるかも知れぬ、これは大なる冒險の事業であるから、犬に對する切なる望みを放棄し、新シベリヤ島に向ふた。嘗てはハバロワに石炭を得る能はず、次でレナ河口に家郷に音信を通ずるを得ず、今亦優良なる橇犬を得る能はず、重ね重ねの不幸である。然しこれも前途の大目的に對しては意とするに足らぬ。

フラム號氷山に固着す

九月十八日の夜、フラム號は新シベリヤ群島の極西なるビエルコフ島を過ぎた、此處でナンセンは、トル男爵が自分の一行が萬一船を捨てた場合に、シベリヤを横ぎつて歸國する用意のためにコテルニイ Kotelny に遣せる貯蓄品を見る積りであつたが、これも時間なき爲めに中止して、北に北にと進んで行つた。

かくて九月二十日北緯七十七度四十四分の處に達した、此處まで氷にも妨げられずに進んで來たが漸く氷に出會つた。仍てその端に沿ひ東に進んでサンニコフ Sannikov Land を探り、それよりベンネット Bennett I. に行こうとしたが、此の方面には、氷が多くて兎ても行かれそうもないので、進路を北西に採り、九月廿一日、氷中の一灣に達した。氷は南西の方面に連つて居て、今度こそはどんなにあせつても進むべき路を看出すことが出來ぬ。仍て翌二十二日に豫定通りに船を氷山に着けて氷の包圍するにまかせた。氷は間もなく船の周圍を包み終つた、これからは最早船を操る心配は無くなつた。此の場所は、實に北緯七十八度五十分東經百三十三度卅七分である。

船の運命を氷に托す

始め二三日の間は北方に漂流して九月二十九日には北緯七十九度を過ぎ前途の望み充分であつたが、間もなく、此の希望は全く打ち破られた　即ち北風が吹起つて長き間吹き續き船は次第に南東に押し流され、十一月八日には、北緯七十七度四十三分東經百三十八度八分に逆戻りしたが、それからは風が南と南東とに變じて北と北西との方面に船を押し流し始めた、實に悲喜交も迫るとでも形容しようか。

船は氷壓に耐ふこと鐵壁の如し

十月になつて、氷の壓迫は益甚だしく、秋から冬まで連續して

船を攻擊する。初めは重に潮汐の爲めに二十四時間に二回壓迫して二回離れるのを認めた。壓力は滿潮には最大で時としては數尺位船を持上ぐることもあつた。氷の離るゝと共に船は舊位置に降下する、此の大壓迫は他の船であつたならば、全く致命傷であるが、フラム號は豫定以上の好結果を得た、何ともない。氷は堆く積り積つて、船腹に迫つて碎ける。其の音響の囂しさ時としては食堂に座して互に語る聲さへも聞こえなくなる程であつた。それだから最初は其の度毎に船の運命を氣づかつたに係らず、船材の撓む微音だもない、實に安全なものであつた。

船員は此の物音に最初は心配したが、次第に面白かり、甲板に上り熟視して樂しみとして居つたが、間もなく之に厭き、如何に壓迫が加はり、如何に大音響を發するも、平然として最早見に行くものもない。

フラム號内の情況

フラム號は恰かも安全なる城塞の樣であつて、如何に外界の寒き時でも、船内は愉快なる暖房であつて、極地にあるとは　とても想はれなかつた。

船内の溫度は、最低は華氏の零點下六十三度であつたが、乘員は毛織の衣服と防風の外套とで裝つて居たから、室外に居ても溫たかかつた。フラムは防寒に適して居つたから、斯く低溫なるに係らず、船内では新年まで火を用ひなかつた。

船員の健康狀態を見るに、一行中一の病者がなかつた、フラム號の如く、良好にして衛生法に適へる船であるならば、極の海は

健康地であるといふに一同一致した、又風車は絶へず廻轉し、電燈は之に由て起り、只風なき時のみ通常の油燈を用ゐた、船内では、愉快に過ぎ、一定の時間は各其執務に務め、絶へず科學的の觀測研究に從事し、然らざるものは、文學遊戯音樂其他諸種の作業があつて、一人として、以前の北極探檢隊の訴ふるが如き單調を感じなかつた。

フラム號は、實に各種の科學的研究に最良の觀測所であつた、從來嘗て見ざる程の貴重なる材料を、山の如く携へ歸るを得たのも亦怪しむに足らない。

大尉シグルド・スコット・ハンゼン Lieutnant Sigurd Scott Hansen は、氣象、磁力及び天文等の觀測を擔當し、完全なる結果を得た、ドクトル・ブレッシング Dr. Blessing は、植物の研究と北光の觀測の大部分を受け持ち、其の本職なる生理學や醫學の觀察をも忘らなかつた。此の外動物學上の研究も船中にて出來たし、錘測、溫度の測定、海水の鹽分、氣中電氣の觀測等をも行つた、實に學術調査は充分で且空前であつた。

極海の狀態

シベリヤ海岸の近傍と、北緯七十九度附近の海は、甚だ淺くて九十尋に足りないが、稍其の南では、深さか遽かに增してくる、又、これより北の海では、千六百尋から千九百尋となる。北氷洋の最も深き窪んだ土地は、スピッツバーゲンとグリーンランドの間を通じて、北大西洋から北の方に延びて、深い水道となつて居ると考へることが出來る、此の窪き水道の發見は、從來北氷洋が

淺き海として立てたる色々の說を打ち破ることが出來る。多數の海底の標本に、常に生物の缺けたること、海水の溫度と鹽分の分布、寒き表面水の下に暖き鹽分强き水層あること等の諸問題がある。

フラム號船の漂流する方向

船の漂流する方向と速度とは、常に變化し、其進路は決して直線ではなかつた、時としては進み、時としては退き、東に西に樣々に變化した、若し之を圖に示したならば、兎ても手を下す譯には行かぬほどであるけれども、其の大體の方向は、冬から春にかけては北西に進むだが、夏は北風で妨げられた。

斯の如く漂流して翌年六月十八日には北緯八十一度五十二分に

達したが、又もや北西の風がやつて來て南の方に吹き流され、其の夏の間は低緯度に漂流して居つた。十月二十一日に至つて、漸く北緯八十二度東經百十四度九分に達した。千八百九十四年即ち明治二十七年の耶蘇降誕日には、凡東經百五度北緯八十二度に達し、二三日の後、北緯八十三度二十四分に進んだ、これが今迄人間の達したる最も北である。

フラム號は氷の最大壓力に勝つ

千八百九十五年　月四日——五日ともフラム號は大なる壓力に打ち勝つた。フラム號の今回探檢に上る以前に、北極探檢家の泰斗サー・レオポルド・マックリントック Sir Leopold McLintock は曰く、フラム號は能く夏期の氷の壓力には堪ゆるだらうけれども、冬の間

には如何に堅牢の船でも兎ても望みがないと、今フラム號に就て之を見るのに、堅氷は此の兩日には其の厚さが三十尺に達した、單に此の堅氷に密閉せられし計りでなく、數限りなき氷塊がすべつて來ては其の左舷に迫る、其壓力は大したものであつた、その上に氷は段々積み重なつて網具よりも高くなつて來た。たとい船の碎けることがなくとも、少くも船の埋められてしまう虞がある、船中の人は一人も船の無事を信ずるものがなかつた、仍て取敢ずカンバス製のカヤク Kayak(漁舟)、炊事用具、燃料、天幕、手橇、橇等をば皆船内から氷上に持ち出し、一同船を捨てゝ、去る準備を怠たらなかつた。

けれども、フラム號は吾人の想像以上に堅牢であつた。氷の壓迫が其の極に達した時、即ち一同フラム號に對する一縷の望みも絶えんとせし時、將さに船材の撓みきしらんとせし時、突然フラム號は堅き氷を破つて、徐々に氷の間より持ち上つたのである、一同驚喜して船體を調べた處が少しの裂目さえ見付からなかつた、ナンゼンもこれから後は此の船は如何なる危險にも堪え得ると信じたそうである。

此の事があつて後、稍壓力も鎮まり、船は風に從つて北と北東との方向に吹き流された。

(二) 橇旅行

氷上突進の用意

フラム號は次第に進行して、今やフランツ、ヨセフの北なる最高緯度に達する時が近づいて來た、夏季早々にはスピッツバルゲン

の北なる海に近づくは必然であると考へられた、是以上に北極には近つけぬといふ見込も判然したから、ナンゼンは、斯る時に應ずる一新方案を考へて居つたのである。

それはフラム號の航程以北の海を探らんとの希望であつて、之を實行するには、橇に乘つて進むより外に良法がないのである。

然し、單に橇に乘るといへば、極めて簡單であるが、北氷洋の海上で、命の親と頼むフラム號と一旦別れたならば、再び同船に歸る見込はない、他の方法で歸國するより外に致方がない、實に冒險中の大冒險である、ナンゼンは、斯る大冒險に他人を遣るは自己の責任上爲すべきことでない、勿論志望者はあつたけれども、仍て自分の外に大尉ヨハンゼン Yohansen を選んだ所が、氏も亦同行を快諾した、そこでフラム號船中に於ける探檢一切の任務は、之をスウエルドルップ氏に一任した。

此の氷上突進用に供する爲め、冬期間工夫を凝らして、平坦ならざる上を犬に曳かしむる橇を造り、又別に長さ一丈二尺其内に一人と四ケ月分の食糧を容れ、數頭の犬を載するに足りる二隻のカヤクを造つた、其の骨には竹を用ゐカンバスで之を掩ふた、重量は四十斤内外であつた、食糧には主もに乾肉、乾魚、燕麥粉の麵包、ビスケット牛酪等で適宜の大さにして帆木綿の袋に容れた橇用の犬は常に驅使して旅行の練習を怠らなかつた、又天幕や臥蓐等を用ゐて色々の實驗を試みた。

フラム號との別離

北極長夜の明けるのを待つて、ナンゼンとヨハンゼンとは、二月

二十六日、橇六犬二十八頭カヤク二艘を率ゐてフラム號と別れ橇で四日間うね〳〵として居る氷上を進むたが、荷物が多過ぎて迚も目的地に達しさうもないことを發見した、仍て斷然船に引還し橇の數と食糧とを減じ再び征途に上る積りとして、暫く出發を見合はせた。

三月三日、太陽が初めて地平線上に現はれた、これは人間の經驗せる最も長き極の長夜の翌日である、北極地方では、これから當分の内、太陽は地平線に沒しない、即ち決して夜がないのである。極地に於て、永く續ける闇の夜が明けはなれ、まばゆき太陽が低く東の空に輝き出たる時、其の樂しさは如何ばかりであつたらう。

今回は計畫を改め、食糧は犬の一ヶ月分と、人間の百日分とに減じ、極めて輕裝して、三月十四日第二の訣別を告げた。此の度は橇は三隻で其の二隻には二隻のカヤクを乘せ、二十八頭の犬に曳かせた。

橇の進行遲し

最初は豫想の如く氷が滑かであつて進行意の如く、三月二十二日迄に北緯八十五度十分に達した。是からは食糧の減するに從て進行が段々捗ることゝ考へだか、氷の斷片は再び不平均となり、氷は一行の方面と反對の方面に漂流する、漸く三月二十四日には八十五度十五分、同二十五日には八十五度三十分に達したが、氷が南に流れることが判然として來てからは氷上の進行甚だ遲く、氷の高さ邱や、積つて居る氷の峯を突進して橇を曳きずらなけれ

ばならず、又これ等の氷に遇へは犬は殆んど用を爲さない、只佇立して人が橇を曳きずるのを待つて居るのみである。此の樣にして、一度安全の地を過ぐれば、間もなく前の樣な險しき處となる

氷の結合

氷は常に運動して互に衝突し、自分の周圍で碎ける響が雷の樣であつた。兩人は四月三日には北緯八十五度五十九分に達した。兩人は、北に行く程氷の狀態が良くなるものと考へ全力を盡して突進した。四月四日には八十六度三分に達したが、氷は益惡く、七日には最早一歩も前に進めなかつた。若しフランツヨセフ陸の方面も此の通りであるならば、それに行くことも出來ぬ、此の時は北緯八十六度十四分東經九十五度である、これが前人未踏の極地であつた。仍て氷の狀態を探つて進行することが出來るか否かを確めるために、スキーで北行したが、行くべき途も見えない又近所の一番高い氷の岳に登つて見渡したが、一望皆結合せる氷の陸と疊々たる氷の山とである。

極地の現狀

此の附近には、何れの方面にも一の陸地が見えぬ。氷は風のまに〳〵漂ひ流れて、長距離の間、大陸又は島に支へられぬ樣に見える。此の方面には北極まで迚も陸地があらうとは思はれぬ。假令北極の彼方が陸地で北アメリカ群島の續きてあるやも知らぬがこちらまで續いては居らぬ。

溫度は、始めの三週間は、華氏寒暖計零下四十度内外であつた

が、四月一日には零度以上七度六となり、忽ち零下三十六度四に下つた。それのみではない、寒風吹きすさび、苦寒骨にしみ、被て居る毛布の服は良かつたが、餘り輕過ぎて身體の汗の爲め氷となる。特に惡かつたのは、上衣の毛布ジャケットで、滿面に厚い氷が積つて、臥囊の中で毎夜之を融すに一時間を費し、之が爲めに、凡そ一時間半づゝ齒を噛みしめて、漸く溫まるまでに、體溫の徒費さるゝことは大變なもので、あつた。翌朝臥囊から出ると、數分の內に被服は復た忽ち化して氷となつてしまう。かくて三月の最低溫は零下四十九度最高溫は零下四度であつた。

大失策

ナンセンは最早北進することを止め、進路を變へてフランツヨセフ陸のフリヂエリー岬 Cape Fligely に向つた。此處は前の通りに路は困難であつたが、一日程で氷も歩みよくなつて來た、二人とも毎夕臥囊に入る前に時計を卷くことに定めて居たが、前進を急ぐ爲め、時として日程を甚だ長くして、四月十二日などは囊中に入るまでに三十六時間を經過した、時計を卷くのに心附いた時は已にそれが停つて居た、何たる不幸なことであつたらう。此時迄經度の測定をしなかつたことが、三日間であつた。無論其の翌日時間の測定はしたが、三日間の行程の計算は容易ではなく、此の間に氷の漂流がいくらであつたかも知ることが出來ぬ。けれども先つ大体は大差はなかつた、ナンセンは時間を精密に知る爲に月の距離を測ろうとしたが、運の惡い時は致方のないもので、其の計算に必要なる表を本船に置き忘れたのであつた。

初めて狐の足跡を認む

四月二十五日には北緯八十五度に來た、こゝで二つの狐の足跡を發見した、是は無論陸地に近き證據と見るべきものであるが、時しも一天晴れ渡つて居るのに、何れの方向にも島らしきものは其の痕跡さへも見えない、唯兩人の進行を妨げる氷の裂目と溝とが眼につくばかりである。此の如き低溫度であるから、其の水の上に尙薄い氷が張つて、とてもカヤクを用ふことも出來ぬから、之がためには數哩の遠廻りをせなければならぬことがある、或時はこれがために半日を費したこともある、此等の溝や裂目は南へ行くに從つて段々多くなつて來る。進行を助けさすために伴れて來た犬の爲めに却て妨げらるることが多い、又食糧は次第に減つて來る、仍て不愍ではあるが、一頭づゝ犬を殺して之を殘りの犬の食糧にした。初めの中は犬の中には共喰ひをするのを厭がるものもあつたが、他に食ふものがなく飢に逼つて來る所から、次第に貪り喰ひ、一頭を屠るとすぐ跳び附くのを防ぐのに困難した程になつた、地獄の餓鬼も想ひやられるではないか。

橇犬の死亡

犬に與へる食料をば次第に減じて最も少量とし、出來るだけ遠くまで犬を生存させやうとするけれども、犬は次第に疲れて來て忠實に重荷を曳きながら進んで、忽ち疲れ倒れて再び起たなくなる、仍て止むを得ず之を其の場で殺すか、橇の中にかき入れ、夜營の際に之を屠つた。

六月には、氷の間の溝は益多くなり、氷の狀態も危險となつて來た、犬もカヤクも橇も雪の上からこの溝に陷ゐる。犬の數は益少くなつて來た、進行は殆んど不可能に見える、兩人は外に方便もないから、唯全力を盡して南へ南へとあせるのみである、犬も食糧も最早最少量となつた。

ペーテルマン陸ありや

ペーヤー氏 Payer の地圖には、北緯八十二度の處にペーテルマン陸 Peterman's Land がある、ナンゼンは先づ此の島に上陸したならば、進行も容易くなるし、鳥類も大分居るから糧食の助にもなると考へた。然し此の考へは空頼みであつた。五月の末には北緯八十二度二十一分、六月四日には北緯八十二度十八分、六月十八日には北西に漂流して北緯八十一度二十六分に達し、フリヂエリー岬の北二十哩許の處に來た筈であるのに、一つの陸地も見えぬ。疑惑は益加はる、氷は益危險になつた、加ふるに食糧の缺乏は如何ともすることが出來ぬ。

海豹の美肉に蘇生す

嗚呼天は此の偉人を殺さなかつた。六月二十二日一大海豹を認めて之を銃殺し先づ蘇生の思ひをなし、こゝで雪の融けるのを待つことに定めた。七月二十二日頃未知の陸地を認めたが、此の島に行くには、なか〳〵大なる危險を冒さなければならぬ。

熊に襲はれ九死に一生を得

此の地に滯留中、一の大危險に出遭つた、或は運惡くば之が爲めに兩名の最後を告げたかも知れぬ程であつた。或時、兩人が氷の中の一の溝をカヤクで横ぎらうとしたことがある、何時も溝を横ぎるには、二隻のカヤクを氷上で繋ぎ合せ之を水上に浮べ、犬と共に匍匐つて甲板に乘つて漕ぐのを常とした此の時ナンセンは自分のカヤクを氷の端に持て來て、その始末をするに餘念なく、ヨハンゼンも自身のカヤクをナンセンの傍に曳いて來やうとして居つた、處が、不意にナンセンの後ろに妙な音がしたから、振り向て見ると、こは如何に熊が仰向けに仆れて其上にヨハンゼンが乘つて居る、ヨハンゼンは熊の喉を扼へつけて居るのであつた、ナンセンは驚きながらもカヤクの前甲板の銃を取らうとすると、此の時遲く彼の時速く、カヤクは滑り出して水に入り、銃を取ることが出來ない、ナンセンは全力を盡して重きカヤクを曳き上げたが、其の間にヨハンゼンは自若として曰く、急にしなければ萬事窮すと、ナンセンは漸く筐中の銃を取出し、曳金を引て向へば、熊は已にナンセンの面前に來た、狙違はず熊の耳の後に中つて、熊は二人の間に仆れた、ヨハンゼンの受けたる傷は僅に手胛だけであつた、實に危險の極であつたが、幸ひに之れがため新鮮の良肉を獲ることが出來た。

初めて陸地に上陸す

海流は強くなり、氷は碎けて散亂し、氷の溝の間には小さき氷塊が充滿して居る、カヤクを浮かせる途もない、仍て、これ等の上をピョン〳〵と跳越しては後から櫂をひき寄せつゝ行かなけれ

はならぬ、氷塊に跳び乘りし刹那、身の水中に顚覆せんとしたこと十回や二十回ではなかつた。此の如き危險が半月も續いた。八月六日になつて漸く北緯八十一度東經六十三度の處で一の陸地に上陸した。

此の陸地は四個の群島で、全く氷雪の爲めに掩はれて居る。ナンセンはノールウエー國の神話に基きヒルテンランド Hirten Land と名をつけた。此の諸島の北側に一の水路を見つけて、カヤクで西に向て漕いで行つた。

忠實なる犬を棄つ

もう斯うなれば、殘れる忠實勇敢なる此の二匹の犬も用うるに所がない、之を海上に伴ふには前途に少からぬ不便がある、といふて陸地に殘せば餓死するより外に途がない、誠に無情なる致方ではあるが、他に方法が無いから、愍然ながら之を銃殺して氷上に棄てゝ去つた。

奇鳥ロッスガル

此のヒルテンランド島の近傍で、生物學上の良き發見をした。夫はロッスガル鳥 Ross's Gull (Rodostetiu) の發見である。此の鳥は、今まで人に知られない鳥で、其の胸が美しき薔薇紅色で、其の尾が楔の形をして、其の飛び翔る有樣のゆつたりとして居るなど、實にかゝるさびしき寒地には他に類例の無い程美しく、これ程心を慰藉せしむるものはなかつた。此の鳥は、北極に近い所で何處から來るともなく、一羽二羽位づつ時々見えたことはあるが、今

此の鳥の無數に群居するものを見て、始めて其の生れ故郷を知ることが出來たのである。此の時は季節が既に晩かつたから、其の卵を看出すことが出來なかつたのが甚だ殘念であつた。

氷上の冬籠り

其後兩三日間は、濃霧が深くて何處も見えなかつたが、八月十二日に少しく霽れて來た。南の方を見渡すと、廣い陸地といふよりは一くさりの島々が連なつて横はり、また西の方にも島が見える、つまり南東から北西に廣がつて居るのである。ペーヤー氏の地圖には、こんなものは決して無かつた、ナンゼンの考へでは、此處はオーストリヤ灣 Austria Sound と殆んど同一經度にあるから、若しさうであるならば、兩人は丁度ヴイルチエック陸 Vilczek Land と

ドーヴ氷河 Dove Glacier とを横ぎつて居る筈であるのに、近所に一つの他の陸地も見えぬ、又オーストリヤ灣の特徴と見るべきものもない、ローリンソン灣 Rowlinson Sound も消失したか全く見えない。ナンゼンは、これは自分の測り來つた經度に大なる誤りがあるのではないかと考へたが、それにしてもどうも疑はしい、或は近頃になつて時計が急に狂ひ出したのではないか、など、色々に考へたが、どうも分らなかつた。兎に角ナンゼンは、今は其の目的地たるフランツヨセフ中の未だ知られて居らぬ西岸の某地に達したのか、若しさうでなければ、地圖の上にギリス陸 Gilis Land とてスピツバーゲンとフランツヨセフとの間にある不思議の陸地に達したものと考へた、それ故に南か南西に航路を採つて進むときは、終にはスピツバーゲンに行くことが出來る、此の島にはノー

ウルエー國の獵船が來るから、それに便乘すれば歸國することが出來ると考へた、そこで船を漕いで進んだり、又は氷の上に船を曳摺つたりして、漸く北緯八十一度三十一分の海の溝を通り、こゝで、開きたる水上に出で、陸の北西の岸に沿ひ、南西に進み、海を越えてスピッツバーゲンに達するの方針を定めた。

八月十八日は風があつて、海から陸に氷を吹きつけて、これが爲めに丁度一週間氷に閉ぢ込められた。それから漸くカヤクを進めること一日二日で、八月二十六日に北緯八十一度十三分東經五十五度半の處で復た氷に閉ぢ込められた。

處が、秋は既に深くなり、これからスピッツバーゲンまで長き旅行を始むるには、もう晩くなり過ぎた、迚も冬の來ぬ中に行き着く見込は立たない。幸ひ今居る此の場所は、鳥獸を捕るにも都合が好さゝうでもあり、冬までの準備をするにも充分の時日もあるから、此處を冬籠りの地と定めて、それ〳〵準備に取りかゝつた。

冬籠り準備

冬籠り準備の第一は、海象を銃殺して其の脂肪を採り、之を燃料にしなければならぬ、處が、之を銃殺した所で餘り大きすぎるから陸や氷の上に曳上げることも出來ぬ、そこで、水の中で皮と脂肪とを剝ぎ取ることゝした。幸ひに熊も大分居たから、これを冬籠りの食料とすることに定めた。次には、土や石や苔などを集めて小屋を築き始めたが、屋根の葺き方には大層苦しんだ、百方苦心の末、漸く、一本の流木が濱邊に打ち揚げられてあるのを見

付け出して、之を棟とし海象の革を其の上に張つて、革の兩方の端には大きな石を載せ屋根の上には雪を積んだ、今度は煙突を作らなければならぬ、これにも石がないので大分困つた　止むを得ず、氷と雪とを積み上げて造り、冬籠りの間に三度改造した。

宛然たる水晶宮

小屋が漸く出來上つたから、此の内に居住することゝした。薪炭の料にも、點燈の用にも、室を暖めるためにも、すべて海象の脂肪を用ゐた。食糧とては單に熊の肉のみである。アルミニュームの鍋で夕に熊をフライにするかと思へば、朝には之を煮て喰ふのである。寢床や臥囊にする材料はすべて熊の皮である。暖を取る爲に兩人で一の囊の中に眠ることゝした。小屋は僅かに長さ十

尺濶さ六尺の矮屋ではあるが、不自由なく暮らすことが出來た。勿論極地のことゝて、冬の暴風は荒れに荒れて、其の勢の猛烈さは一通りではないが、小屋の過半は地中に埋つて居るのだから、吹き倒さるゝ心配はいらないのである。又絶えず燈火を用ゐて室内の溫度を氷點内外に保つことが出來た、けれどもそれは眞中の近邊であつて、隈の方で殊に四方の壁の近所になると、外から冷えるために大變な寒さで、氷が厚く結ばれつき、氷柱が垂れ下り、それが燈火の光りに映つて、室内は八面玲瓏たる大理石窟といはんか、水晶宮裏にたとへようか、實に美事なものであつた。然し、天井は低いし、床はごろ〳〵した石ころで造つてあるから、立つ時には頭をまげ、臥す時には體を屈ませなくてはならない。これだけは甚だ苦痛であつた。

狐の跳梁

此の小屋の中で、兩名の勇士も殆んど爲すことなく、無聊を慰むべき方法もなく喰つては眠り、醒めては喰ふといふ太古民族の狀態で過ごしたが、然し、之が爲め運動の不足から病氣に罹るといふ樣なこともなく、食慾は何時もの通りに進み、うまき熊の肉と脂肪とに舌鼓をうち、天氣が好ければ屋外に飛び出して毎日一時間づゝ散歩を試みて居つた。勿論風が烈しい日には、面を向けて歩くことの出來ぬばかりではなく、一歩屋外に出ると直に吹き飛ばさるゝ樣なことも多かつた。數日の間、辛うじて僅に飲水の料にする氷と食料たる熊の腿を曳ずり込む爲めに出ることもあつた。

十一月から三月迄は、最早熊も來ず、何の意外の面白味もなく、唯一の樂しみは一群の狐連がやつて來て、小屋の上に乘つて、氷結せるハムを嚙むのであつた、段々慣れて來ては、家鄉の室内で天井の鼠が噪ぐ位のもので、又これが來なければさびしい程になつて、之がため澤山の食糧を喰滅らさるるのも吝まなかつた、此の狐の中には、白いのもあり、黑いのもあつて、之を殺して其の皮を剝ぐと、隨分高價なのが澤山發らたのであるけれども、殘念なことには、火藥の貯へが甚だ少いから、之を銃殺することも出來なかつた。

要するに、此の冬は想ひしより案外過ごし易くあつた、若し數卷の書物と、少許りの麥粉と砂糖とがあつたなら、此の生活は北極海上の王侯であつたであらう。

初めて春光に接す

無聊の冬は過ぎ去つて、やがて樂しき春が日光と鳥とを伴れて來た。到底忘れ難きは極地の春光である、まだ太陽も見えぬに南の空は段々に一日一日と明るさが增して來る、やがて日光の見えさうになる數日前、一群の鳥が南から北の方へ飛び行くのを認めた、嗚呼此の鳥は冬籠りの兩勇士に春光來を報ずる天使であらう紹いて、空は次第に明るくなつて來る、周圍の山は一層明るさが增して來る、數多の鳥は飛去り飛び來り、或は此等の山に降りて喋々嚶々。南の空より北の空に春の光は次第に送らるる、やがて、まばゆき光線は天空に放射線を畫き出し、間もなく今迄見たこともなき程大きな太陽が南東の地平線上に現はれた。天も地も水も

氷も、鳥も人も……たつた二名の人だが……一陽來復の春色に會した。此に於て、一時も早くカヤクをスピッツバーゲンに向つて操つる念慮は勃々として起つて來た、家鄉を懷ふの情は甚だ切である。いくら空前の大功を奏したる偉人とはいへ。兩名は出發の準備に寢食を忘れて急いだ。

偉人の希望は新調の衣服

幾年かの旅行で、衣服は破れに破れ、脂と垢はしみ込んで居る、最早迚も被ることも出來ぬ。そこで携へて居る二枚の毛布でどうにかかうにか二領の新らしき衣服を製造した。けれどもシャツはどうしても出來ない、石鹼なしの生活は、實に不自由なものだといふことをしみ〳〵悟つた。身體を清潔にするにも、シャツの洗

瀦をするのにも。先づ身體の方は、まあ熊の血と脂肪とをこすりつけ、これを苔の類で擦りおとして幾分か洗ひ潔めることが出來たが衣服はなか〳〵こんなことでは洗へない、色々試めした上、先づ之を煮たてゝ、小刀で掻き落し、漸く被て歩かれる程になつた。兩人はハールウエー國に歸つたならば、先づ清潔の衣服を何よりも先に着たい、これが人生の最大快樂であるとは、この偉人の心中に往來して居た大々的希望であつた。

冬籠後の出發

五月十九日準備が全く出來上つたから出發した。同二十三日は北緯八十一度五分まで來て、此處で開きたる水上に出た。氷上旅行は終りを告げたのであると信じられた。けれども困つたことには、暴風が六月三日まで吹き續き、之が爲めに、無數の氷が襲ひ來て迎もカヤクが出せない。仕方がないから氷の上を南行したが、幸ひにも順風であつたから橇に帆を掛けた爲め、進歩が意外に早くあつた。やがて廣々とした陸地に出た、其の北の海岸が更に西の方に連つて居つて、此の岸に沿ふて西北西の方に一條の水路がある、此の水に從て行くと、風の爲めに北に吹き送られないとも限らぬから、平らかな氷の上を尙南へ南へと進んだ。

六月十二日、漸く此の群島の南側に來た。一條の水路は此の島に沿ふて西に續いて居る、幸ひ風が順風であつたから、二隻のカヤクを結びつけ、竹竿を立てゝ檣に代へ、之に橇の帆を掛けて進み風が止めば櫂で船を動かした。斯うして行けば、スピッツバーゲンに達してハールウエー國の獵船に乘るのも數週間の內である、

とナンセン及ヨハンゼンは喜び勇んだ。

此の海岸を過ぐる際、ナンゼンは自分の側定せる緯度と、レ●スミス Leigh Smith のフランツ●ヨセフの南岸で見出した緯度と著しく一致し、又方角や外觀も共に均しかつたのを見た。そこで、ナンゼンは、尙フランツ●ヨセフ陸の南岸なるジチー陸 Zichy Land として今まで連つて居る陸と考へられたものは、今通過した處によると、一續きの小さき嶋嶼であつたものを一直線に横ぎつて、廣き水路を通つて來たのではあるまいかとの疑を起した。

殆んど凍死せんとす

此のカヤク航海中、種々の不幸に出遭つた、或る日海岸に沿ふて帆を孕ませて進んだ時、西の方の行手を調べやうとして、氷の

堤に舟を結び附けて上陸したが、どうしたのか其の間に、船が氷から離れて風に誘れて流れ去るのを見附け出した。兩名の食糧も旅裝束も、銃器も、彈藥も、一切のものが皆舟の中にある、此の舟が去つたならば萬事休す。唯一の安全なる方法はこの船に跳びつくにあるのみだ。けれども　風の力は中々に早く舟を持ち去る。まゝよ死生は天の命ずる所だ、人事を盡して天命を待つのみだ。ナンゼンはざんぶと此の氷の海に跳び込んで、拔手を切つて舟に突進した。流れは疾し、水は冷たく、一瞬一瞬身體は自由を失つて來る、けれども有らん限りの勇氣と力とを振りしぼつて泳いだ。十間より一丈、一丈より一尺、やがて船舷に達し、最終の氣力を勵まして船に攀ぢ上つた時は、氣息奄々たる有樣であつた、けれども之がために起死回生の効を奏したのである。

海象の襲撃を脱す

前の危険を漸く漸く免れて間もなく第二の危難に出會つた。それは海象の襲撃である、此怪獸は、始め船の底をごつん〳〵と烈しく擊ちて、舟を顚覆させやうとしたとも幾度であつた。今回の中々に猛烈である、突然、ナンゼンの乘つて居る舟の舷側に上り、一の鯖脚を舷に掛けて引つくりかへさんとし、それと共に長い、二本の牙を船底に突つ込んだ、幸ひにも此の牙がナンゼンに當らなかつた、ナンゼンはいきなり携へて居た櫂を振り上げ海象の頭を目掛けて力限りなぐりつけると、海象も怒氣天を衝くといふ勢で、ナンゼン目掛けて跳びかゝらんとしたが、どうしたのか急に水底に沈んで去つてしまつた、多分頭部の痛さに堪へなかつた爲めであつたろう。これで海象は逃げ去つたが、今度は、海水が海象のあけた長き裂目から遠慮なく湧き込んで來る、ナンゼンは、其の孔をおさへながら、漸く船を水中に突立つて居る氷塊に着けて助かつた。翌日は、其の修繕と、衣服寫眞機其他海水の浸み込んだものを乾かす爲めに終日を費した。

遠く犬聲を聞く

翌日も旅行を繼續する積りであつた、ヨハンゼンが朝餐を準備する間にとて、ナンゼンは先に起きて、陸地視察の爲めに小高き丘に登つた所が、吹き來る風につれて、山に棲む數多の海鳥の鳴聲が聞える、間もなく聞えなくなつた、半信半疑で居ると、今度はまた風につれて怪しき聲が聞え出した、耳を澄して聞くと、ど

うゐ犬の吠える聲らしい、今は全く疑ふ餘地なく、此の近所に犬の居るのが分つた、犬の居るのは人の居る證據である、ナンゼンは、一刻の猶豫もなく、丘を走り下り、まだ臥褥の裏にあるヨハンゼンを喚び起して之を告げたが、どうして犬が居るかも分らぬから、朝餐を嚥み下し、スキーを着けるが早く矢の如く氷上を犬の聲のあつた方へと突進した。先づナンゼンが海濱に近つくや、ナンゼンの方に向つて來る人間に出會つた。實に探檢家のジャクソン氏であつた。共に一語なく、先づ强き握手が相互の無言の挨拶であつた。嗚呼これでナンゼンとヨハンゼンは全く蘇生した、世界の偉人となつて世に現はるゝことゝなつた。

ジャクソンの優待

これからナンゼンとヨハンゼンはジャクソンの屋舍に歡迎を受くることゝなつた。沐浴の度毎に一枚一枚垢が剝れ去る樣な心持がした次でノールウエーに還つてからと望みし柔かくて奇麗な毛絲の服も被ることゝなつた。髭を剪り、髮を苅り、全く生れ變つた樣な人間となつた。次で美味なる晝餐の饗應を受けた、珈琲も煙草も葡萄酒も、一として山海の珍味の思ひあらざるなく、特に最新の書籍最近の文學に接して其の滿足如何ばかりか、謂ふに、兩名とも獨立羽化して歐米文明の中心地に舞ひ込んだ樣な心持がしたらう。處で、ジャクソンの好意と熱情もだし難く、スピッツバーゲンを經てノールウエーに歸るを止め、英吉利船ウインドワード號の來るのを待つて、之に便乘することに定めた。

ペーヤーの地圖は誤れり

ナンゼンの疑ひは正しくあつた、實際、フランツヨセフ陸の南岸なるノースブルツク陸 North Brook Island が、フローラ岬 Cape Flora に在つて、ナンゼンの經度の觀測が正しくあり、ナンゼンの時計は正しかつた。全くペーヤー圖の誤りより、ナンゼンを不正の路に迷ひ込ましめたことが判然した。ナンゼンが今春通過した廣き水道は、オーストリヤ灣の少しく西の方で、それよりも一層大きくあつてジャクソンが已に之を通過して、ブリチッシュ水道と命名したものである。

フローラ岬頭の滯在

ナンゼンとヨハンゼンが、フローラ岬でジクヤソンの好意に浴して居る間は、小さき研究旅行を試みたり、讀書に耽つたり、又はフランツヨセフを横斷せし旅行圖を調製したりして居つた。然しながら、此の間に兩人及ジャクソン等の頭腦を去らぬものは、水平線上にウインドワード號の現はれ來ることである、一同の頭は何時でも此の方にばかり向く。けれどもなか〳〵帆の影も檣の頭も見えぬ、一日一日と待ちあぐんで來た、此の分では、船は氷に妨げられて、本年はとても來ることが出來まいなどゝ心配し始めるものも出て來た。さあ、かうなるとナンゼンもヨハンゼンも、こんな處に留まるよりは、早くスピッツバーゲンに行けばよかつたと後悔する心が出て來た。若しスピッツバーゲンに進んだならば却て早く船を得て故郷に歸ることが出來たかも知れぬ、とても

此の上冬を極地に過すは耐ふべきでない、いつそ再び行脚の旅につかんなど、心配は心配を生んで、なか〳〵に若心の種だ。殊にナンセンの考によると、自分等二人と北極洋の氷上で分れを告げたフラム號は、今年は必ず歸る筈である、若しさうであると、二人の運命につき、大に心配をすることであろう。ウインドワード號の來るを待つべきか、それにかまはず出立すべきか、心は二つ身は一つ、嗚呼如何にすべき。

ウインドワードの便乘

ナンセンのジャクソンに遇つてから、六週間になつた、心配は絶頂に達した。此の夜、突然ジャクソンが、ナンセンを搖り起してウインドワード號が來た、ウインドワード號が來たと叫んだ。間もなく、ウインドワード號の方からもナンセンとヨハンセンの兩名が居ることが分つて、歡呼の聲喝采の響、天地を震動するばかりであつた。船は英國のものであり、船員も多くは英國人であるのに他國人なるナンセンの成功を、心の底から歡ぶ其の熱誠は、實に美しきものであつた。然しながらイギリス國とノールウエー國とが相互に親密であるのも其一つの原因である。

ジャクソン遠征隊の爲めに、搭載して來た物品は、直ちに船から曳き揚げられて、一週間も經過しない間に、準備が全く出來上つた。八月七日には家郷に送るべき書狀や電報も出來上つた。

ナンセンとヨハンセンとが船に乘るや否や、直ちに出帆した。船足は早く乘心地がよく、實に樂しき想ひをした。船員一同は、出來得る限り兩人を優待するので、兩名は終生此の好意を忘れる

ことが出來ぬと謂つて居た。

フランツヨセフとノヴアヤ●ゼムリアとの間の海上には、氷が甚だ多くあつた、船の小さいのにも拘らず、ウインドワード號のブラウン船長は、巧みに船を操つて、二百二拾哩の氷海を無難に航海した、ノヴアヤ●ゼムリアの北に開いたる海に出で、一直線にノールウエー國の北のヴアルデー港に進航し。フローラ岬を出帆してから六日目の八月拾三日無事到着した。

ノールウエー歸着大歡迎

ナンゼンとヨハンゼンとは、此の通りに、ジャクソンとウインドワード號の好意によつて、今や故國に錦を飾り、數多の同胞のあらん限りの歡迎を受けた。然しナンゼンの故國の土を踏んで、第一

に發せし語は、フラム號及び其の一行の消息如何といふことであつた。ナンゼンの心配は、フラム號及其の一行がナンゼンよりも先に到着して、ナンゼンとヨハンゼンとの行方に對して、無用の心配を掛けることの氣の毒なる爲であつた。然るに、フラム號は、まだ到着せし消息のないのを知つて大に安心した。そこで、先づ無事安着をノールウエーの皇帝と其の政府とに電報で通知した。樂しかりしウインドワード號及其の船員と別れを告げた。

八月二拾一日、ハムメルフエストの港で、其の近傍の一小港のスキエルヴエーSkjärvöから、フラム號及其の乘員一同が、無事に其の夜入港した電報を受けた時、歡びの聲は天にも轟ろく程であつた。

三　フラム號の航海

ナンセンの命令

フラム號がナンセンと別るゝ時に、船長スウエドルップはナンセンから種々の命令を受け取つた。

忠實なる船長は、ナンセンの趣意のある所を了解して、よく其の職務を盡した。

ナンセンのフラム號を去つた後は、船体の安全を圖る務めの外に、氷上の橇旅行に必要なる用意をした、これは、萬一船と別れを告げなければならぬ時の準備であつた、又輕便なるカンバス製の扁舟、即ち各二人を乘せ得るに足る小船は、ナンセンと別れる時には、已に半分は出來上つて居た。橇、スキイ、雪靴。炊事道具の類は、みんな試めして見た、食糧も充分準備が出來て居つて、何時如何なる場合にも、直に間に合ふ樣になつて居た。

千八百九拾五年一月、フラム號は氷の大壓迫を受けた、先づ船舷に壓して來た氷をば、斷えず車で運び去ることに從事したが、此の氷の取り除けは其の後も繼續して實行して居た。

氷の破碎

三月の末、氷の塊が全く破れた時に、船の周圍は、諸方に龜裂が出來て、船の艦を距るゝこと數尺を通じて、廣きひゞ割れが出來た、それに續いて大に壓迫を起して氷は破碎せられ、七月末には　フラム號の船体の大部分は、氷の中に浮んだ。けれども、まだ船の艦には大氷塊がくつ附いて居る。仍て爆發させて之を破ら

うと試みたが、迚も徒勞であつて、たつた一つ小さき龜裂が出來たのに過ぎなかつた。スヴエルドルップは、船上に立ち船員とどうして船を氷より引離して浮び出させることが出來るかと相談して居つた。之れがためには數多の手數と苦心を積んだ。處が、或時遽かに、船が徐々と動き始めて、不意に氷と離れて、萬雷の落つる樣な音を立てゝ滑り落ち、舳からは水煙を立てゝ水上に浮んだ、丁度進水式でもあるかの如く、船員一同、大喝采を以て其の水に返つたのを祝した。然し此の好結果も暫くの間で、八月には再び氷塊に凍り着いてしまつたのである。

再び海流に乘る

ナンセンの船を離れた頃、其後多少の間は、海流は重要なるものではなかつたが、四月の末になつてから、稍強く西の方に向つて流れ出した。西暦千八百九拾五年、即ち明治二拾八年の七月二拾二日、フラム號は北緯八拾四度五拾分、東經七拾三度の處に達した。此の時は、氷の壓迫が隨分強かつたが、フラム號はやはり何ともなかつた。其の後、南西の風と西風とが多く吹いて、船の西に横流する邪魔になつたのみならず、度々東と北の方とに吹き戻された。拾月初迄はこんなことで餘り進めなかつたが、それからは順よく行つて、拾月拾六日、北緯八拾五度五拾七分東經六拾六度に達した。

西暦千八百九拾六年二月中旬、北緯八拾四度二拾分、東經二拾四度に達したが、此の處で意外にも南風に出遇ひ、五月迄漂流を妨げられた。五月以後、再び南に漂つて、七月拾九日には北緯八

拾三度拾三分、東經拾四度の處に在つた。此處で、漸く氷の圍みを脱することが出來た。

氷の壓迫

未だ、世界の何人にも知られざる氷の海を、新シベリアからスピッバーゲンに至るまで漂流し、其間に氷の壓迫を受けしことは一通りで無かつた。前にも記した通り、西暦千八百九拾五年一月の壓迫ほど重大なものはなかつたが、茲に其の年の夏と翌年の六月の壓迫とは、又異樣であつた。即ちフラム號は此の時氷の間の水道に横はつて居た、此の水道は二拾四時毎に、潮汐に從つて開いたり閉ぢたりして居つた。六月の一週間の間、滿潮毎にフラム號の受くる壓迫は大變なもので、一日に一回乃至二回は必ず壓し

上げられて、驚くばかりに高く持ち上ることも度々であつた。けれども船はいふまでもなく幅が廣く且つ丈夫であつたから、其の持ち上げらるゝのが、大そう靜かで、船床にも支柱にも一つの響さへ起さない。船中に睡れるものは少しもこれを知らない、最も眼敏きスヴエルドツプでさへも、翌朝甲板に出て、始めて船が著しく氷面から持ち上がつて居るのに驚いた程であつた。そして、如何なる時でも、こんな場合にフラム號の傾斜は、二度乃至三度最大限でさへ八度であつた。

極海の寒氣

人の能く知れる如く、シベリアのレナ河口の南の地方は、北半球の最も寒い所である、即ち寒極として知られて居る。此度一行